

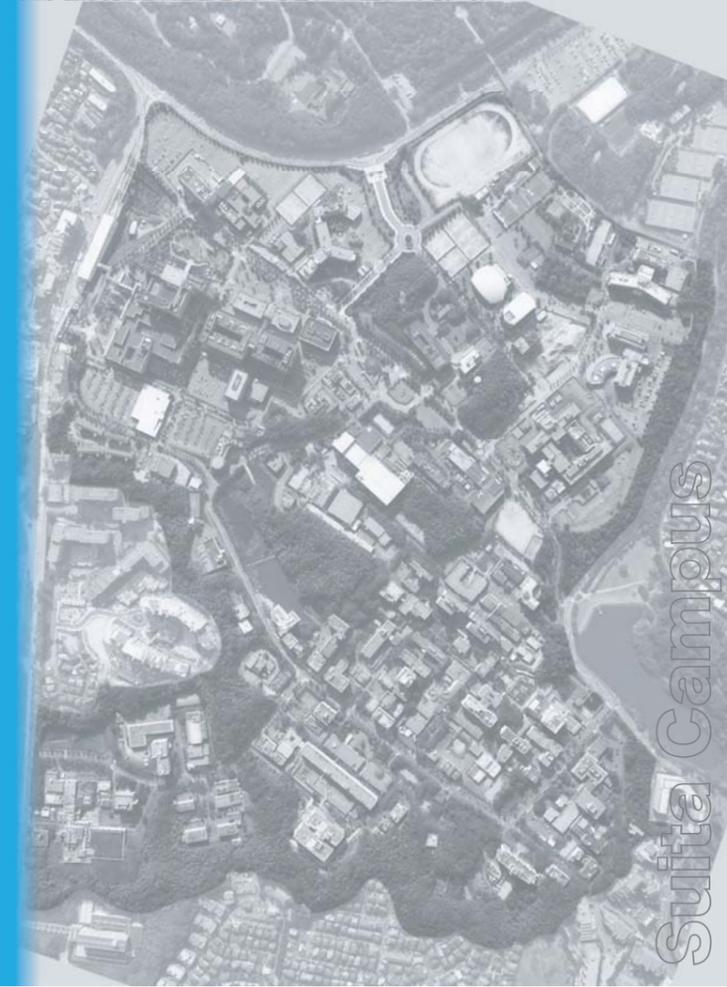
大阪大学キャンパスマスタープラン

個性と魅力にあふれた阪大キャンパス像

2005.3



Toyonaka Campus



Suita Campus

目次

1. キャンパスマスタープランのコンセプト		
1-1. マスタープランの必要性と策定の経緯	-----	2
1-2. マスタープランの構成	-----	4
2. キャンパスの伸ばすべき個性と空間像の読みとり		
2-1. 豊中キャンパスの個性と空間像		
1) 伸ばすべき個性・空間像・資源および問題箇所の読みとり	-----	5
2) 継承すべき場所・風景	-----	6
2-2. 吹田キャンパスの個性と空間像		
1) 伸ばすべき個性・空間像・資源および問題箇所の読みとり	-----	7
2) 継承すべき場所・風景	-----	8
3. キャンパスマスタープランに対する期待		
3-1. キャンパスマスタープラン作成WGにおける意見聴取	-----	9
3-2. アンケート結果の読みとりとデザインへの展開	-----	10
4. ディベロップメントプラン	-----	14
5. ゾーンおよび骨格・核の構成		
5-1. 豊中キャンパスの空間像		
1) 骨格イメージ	-----	16
2) 整備イメージ	-----	17
5-2. 吹田キャンパスの空間像		
1) 骨格イメージ	-----	18
2) 整備イメージ	-----	19
6. 自然資源を活かしたアメニティの形成		
6-1. 豊中キャンパスにおける自然資源の継承と形成	-----	20
6-2. 吹田キャンパスにおける自然資源の継承と形成	-----	21
7. すべての人が安全に快適に移動できる環境の形成		
7-1. 豊中キャンパスの交通ネットワーク	-----	22
7-2. 吹田キャンパスの交通ネットワーク	-----	24
8. 達成手法		
8-1. リーディングプロジェクト		
1) 豊中キャンパスのシンボル空間の形成	-----	25
2) 待兼山周辺修景整備	-----	26
3) 待兼山博物館・周辺環境の整備	-----	27
4) 吹田キャンパスのシンボル空間の形成	-----	28
5) 吹田キャンパスライフコアの形成	-----	29
6) 千里門周辺環境整備	-----	30
7) 吹田分館前オープンスペースの再生	-----	31
8-2. デザインガイドライン		
1) デザインガイドラインの考え方	-----	32
2) 豊中キャンパスでの適用	-----	33
3) 吹田キャンパスでの適用	-----	38
8-3. アクションプラン	-----	42



1-1. マスタープランの必要性と策定の経緯

はじめに

大阪大学は平成16年4月から国立大学から国立大学法人へと組織形態を変化し、新たな出発を迎えることとなった。この組織形態の変革と同時に、急速な技術革新とグローバル化に伴う教育・研究内容と活動範囲の変動、拡大に加え、限界ある環境・資源、生命倫理の尊重、少子高齢化等の社会状況の変化、さらにはわが国経済の停滞と国際競争力の低下及びそれともなう行財政改革の必要性といった諸課題が一挙に大学に押し寄せた感がある。これに対して、国立大学法人は、国立大学時代の閉鎖性や機動力不足の延長線上にあり厳しい状況にさらされているのが実情である。このような中で、今後大学は益々社会との密接な関係が必要となるなか、世界の知的水準の維持・向上に積極的に寄与、貢献するなど存在意義を示さなければならない。（参照：法人化問題にかかる報告書）

大阪大学はこのような状況のなか、大阪の地に根づいていた懐徳堂と適塾の学風を継承し、自由闊達で批判的な精神をもって真理と合理性を追求することにより、知の創造の場として世界第一流の大学を目標とする。創業以来の研究第一主義をモットーとし、第一線の研究成果と実証精神をもって教育を行ない、教育研究の成果を世界的基準によって判断し、社会にその価値を問い利用に供する。大学を社会に開き地域とともに、自由と人権を尊重し国際的学術交流を通じて世界の国々に貢献する。このようにして、教育・研究・社会貢献を通じて国民と社会の信託に応えることにより、大阪大学の「地域に生き世界に伸びる」という理念を実現する。（参照：中期目標・中期計画）

歴史の大きな転換点をむかえつつあるいま、大阪大学が国立大学法人として新たな出発をするこの機に臨み、将来の発展を期して、あらためて自らの基本理念を以下のとおり宣言し全構成員の指針とすること、またグランドビジョンあるいはイメージを明確にするため、教育に関する3つの目標と、研究・教育を特徴付ける2つのキーワードを掲げることとした。

- | | | |
|-----------------|-------------|------------|
| 1. 世界最高水準の研究の遂行 | 2. 高度な教育の推進 | 3. 社会への貢献 |
| 4. 学問の独立性と市民性 | 5. 基礎的研究の尊重 | 6. 実学の重視 |
| 7. 総合性の強化 | 8. 改革の伝統の継承 | 9. 人権の擁護 |
| 10. 対話の促進 | 11. 自律性の堅持 | (大阪大学憲章より) |

教育に関する3つの目標：教養、デザイン力、国際性

研究・教育を特徴付ける2つのキーワード：インターフェイス、ネットワーク

キャンパスの概況

大阪大学は、主たるキャンパスとして、豊中キャンパス（石橋）、吹田キャンパスによって構成される。その他に、草創の地に整備した中之島センターのある中之島団地、宿舎等がある。

豊中キャンパス（石橋）

豊中キャンパスは旧制浪速高等学校以来の歴史あるキャンパスであり、全ての学生が共通教育を受け大学生活を始める思い出の地である。現在、文・法・経済学の文科系学部・研究科、理学、基礎工学の理工系学部・研究科、言語文化部・研究科、健康体育部及び大学教育実践センター（平成16年全学共通教育機構から改組）、附属図書館、総合学術博物館、課外活動施設等が設置されている。

待兼山、浪高庭園、大高の森、中山池等が残り歴史のある自然豊かな起伏に富んだ地形となっており敷地面積426,843㎡、建物面積230,167㎡、学生数約11,000人を擁するキャンパスである。

吹田キャンパス

豊中キャンパスから数キロ離れた位置に昭和40年代の始めから整備された新しいキャンパスであり工学部・研究科、多くの工学・理学・医学系の研究所・センター及び昭和40年後半から整備が始まった薬学部、歯学部、大学本部、また平成5年に移転統合が完了した医学部及び附属病院等がある。

ほぼ平坦な地形の中に各研究科単位でまとまった施設配置となっており、敷地面積996,268㎡、建物面積572,196㎡、学生数約10,000人を擁し、豊中キャンパスのほぼ2倍の敷地を持ち今後の新しい施設増に対応する可能性を持ったキャンパスである。

これまでのキャンパス計画の経緯

・「大阪大学 1999」では①大学院重点化に伴う整備、②老朽狭隘化が著しい建物の改修・改築、③共通教育校舎の整備、④基幹・環境整備の4点を掲げ、歴史と伝統を継承し、衿を正して学ぶ姿勢が自ずと想起させるようなキャンパス雰囲気をもつ魅力ある教育研究環境の整備が求められると記述している。

・平成11年10月に作成した大阪大学「21世紀ドリーム・プラン」は、新世紀を直前に、現在大阪大学が抱えている現状を直視し、将来への展望を真摯に検討しており、施設整備に関しては豊中キャンパスを「21世紀文化と伝統のプラザ」、吹田キャンパスを「21世紀知的交流の実験空間」と位置づけそのドリーム・プランを描いている。

・平成12年9月には施設長期計画委員会（平成12年9月20日にキャンパス計画委員会に改訂）での議論を踏まえて長期計画書を作成し、評議会報告、総長決済を経て文部科学省へ提出しており①老朽狭隘建物の計画的解消、②キャンパス環境整備、③教育研究活動の流動化に対する対応、④環境に配慮した施設整備、⑤社会に開かれた大学、⑥教育研究拠点としての大学院施設の整備を目標として作成している。

・また平成15年3月には工学研究科の教官を中心としたワーキングにおいて、交通環境の改善計画、外部空間のバリアフリー化、外部空間・ランドスケープの計画とデザイン、工学研究科エリア重点地区の空間改善の提案を内容としたキャンパス環境整備計画・デザイン検討プロジェクト2が報告されている。

中期目標・中期計画における施設整備の考え方

本学の法人化に際し策定された中期目標・中期計画におけるキャンパス整備関連の内容は、「本学の教育研究の目標・計画を達成するため全学的・長期的視点から各キャンパスの整備方針に基づきグランドデザインを策定し、世界的水準の教育研究にふさわしい施設設備の整備を図る」と明記している。

キャンパスは教育研究の進展に伴い、常に変化し続けるものであり、調和のとれたキャンパス環境を実現するため、また、良好なキャンパス形成のためには、大学を取り巻く様々な状況の変化や個々の建物の実態に柔軟に対応しつつも、一貫したコンセプトを保持していくことが重要である。（参照：知の拠点）

キャンパスマスタープランの必要性

いうまでもなく本学における教育研究、社会貢献等の展開を考えるうえにおいて、その活動を支えるキャンパス環境の整備充実は将来に亘り継続的に実施されるべき必要不可欠な課題であり、魅力的な施設整備、既存施設の効率的運用等を戦略的に推進するためにはキャンパスマスタープランの策定が必要である。

キャンパス環境の充実はこれまで組織の拡充等に対応した教育研究施設の量的な整備を中心に進められてきた。しかし今後は所有する既存施設の現状を踏まえ、教育研究の進展や学生教職員また地域の人々の要望に応じた機能の向上や有効利用を図ることが重要であり、新たな施設整備はキャンパス環境に配慮し学内における十分な検討を踏まえて実施すべきである。

またキャンパスの利便性や快適性を向上させるため、適切な緑地・広場や適正な規模の駐車場・駐輪場の確保等屋外環境を含めた調和のとれた魅力あるキャンパスを創る取り組みがより一層求められる。

キャンパス整備の対象と経費

キャンパスの施設・環境整備の対象及びその実現手法については以下のように整理できる。

施設・環境整備の対象

- ・ 教育研究の拡充や新たな展開にともなって必要とされる施設の整備
- ・ 教育・研究・生活環境の向上及び国際交流の支援に必要とされる施設の整備
- ・ 老朽化した施設の計画的な改善及び施設の定期的な維持管理・補修等の実施
- ・ 屋外の公共的な空間、広場、緑地等の整備・利用・管理の実施
- ・ 駐車場・駐輪場、構内道路等の交通施設の整備及び管理

これらの施設・環境整備を実施する手法を整理すると以下ようになる。

- ・ 国への概算要求に基づいた予算の確保（補助金、交付金、貸付金、施設整備費附帯調査費、PFI事業維持管理経費）
- ・ 学内配分における予算の確保（総長裁量経費、環境整備費、間接経費等）
- ・ 民間の資金を活用する方法
- ・ 寄付等による方法
- ・ 奉仕活動的な内部マンパワーの活用による方法

上記のような手法があるが、このような仕組みが学生教職員に十分に認識されておらず、そのことが施設や環境整備は要求すれば誰かがやってくれるものという意識を増長させていたといえる。

マスタープラン策定の体制

先に示した中期目標・中期計画等の施策を着実に実行するため、平成16年4月に総合計画室（室長は副学長）の下に施設マネジメント委員会が設置された。その委員会には右上図に示す4つの検討課題があり、そのなかの1つに「戦略的な施設整備方策」が掲げられ、平成16年度中にキャンパスマスタープランの策定を目指すこととなっている。このような性格をもつキャンパスマスタープラン策定の具体的な作業については、学内の建築、都市、環境、交通を専門とする教職員から構成したコアメンバーにて進めることとなった。

他の施設関係検討事項との関連性

施設マネジメント委員会の所掌事項におけるキャンパスマスタープランの位置づけ

戦略的な施設整備方策
 <キャンパスマスタープランの策定>
 ・ 概算要求事項
 ・ 新たな整備手法の導入

合理的な施設利用方策
 ・ 施設の点検・評価の実施
 ・ 施設マネジメント情報システムの構築
 ・ 全学的な利用規程の整備と促進

効果的な施設の維持管理方策
 ・ プリメンテナンスの効果的な実施
 ・ 清掃美化の効果的な実施
 ・ 省エネルギー対策

安全で快適な交通対策
 ・ 構内交通安全のシステム構築
 ・ 立体駐車場の整備
 ・ 構内交通規制会について

キャンパスマスタープランの目標・基本方針

大阪大学のキャンパスは、大阪大学憲章、中期目標、中期計画に示されるアカデミック・プランに沿った、研究・教育等の諸活動が展開する舞台であり、それにふさわしい環境の整備と質の確保を目的とする。

これを検討する枠組みとして、以下を設定した。

<目標>

- ・誇りと愛着がもてるキャンパス
- ・多様で豊かな交流が生まれるキャンパス
- ・地域社会や世界に開かれたキャンパス
- ・キャンパス間、周辺関連施設との連携をもったキャンパス

<基本方針>

- ・資源・歴史を継承し育てる、個性ある環境づくり
- ・将来にわたり教育・研究が実効的に展開できる環境づくり
- ・学生・教職員が充実したキャンパスライフを展開できる環境づくり
- ・アクセシビリティの高い交通と情報環境づくり
- ・地域に貢献できるキャンパスづくり
- ・国際交流に貢献できる世界水準の教育・研究環境づくり
- ・地球環境に配慮したキャンパスづくり

大阪大学キャンパスマスタープランの内容・構成

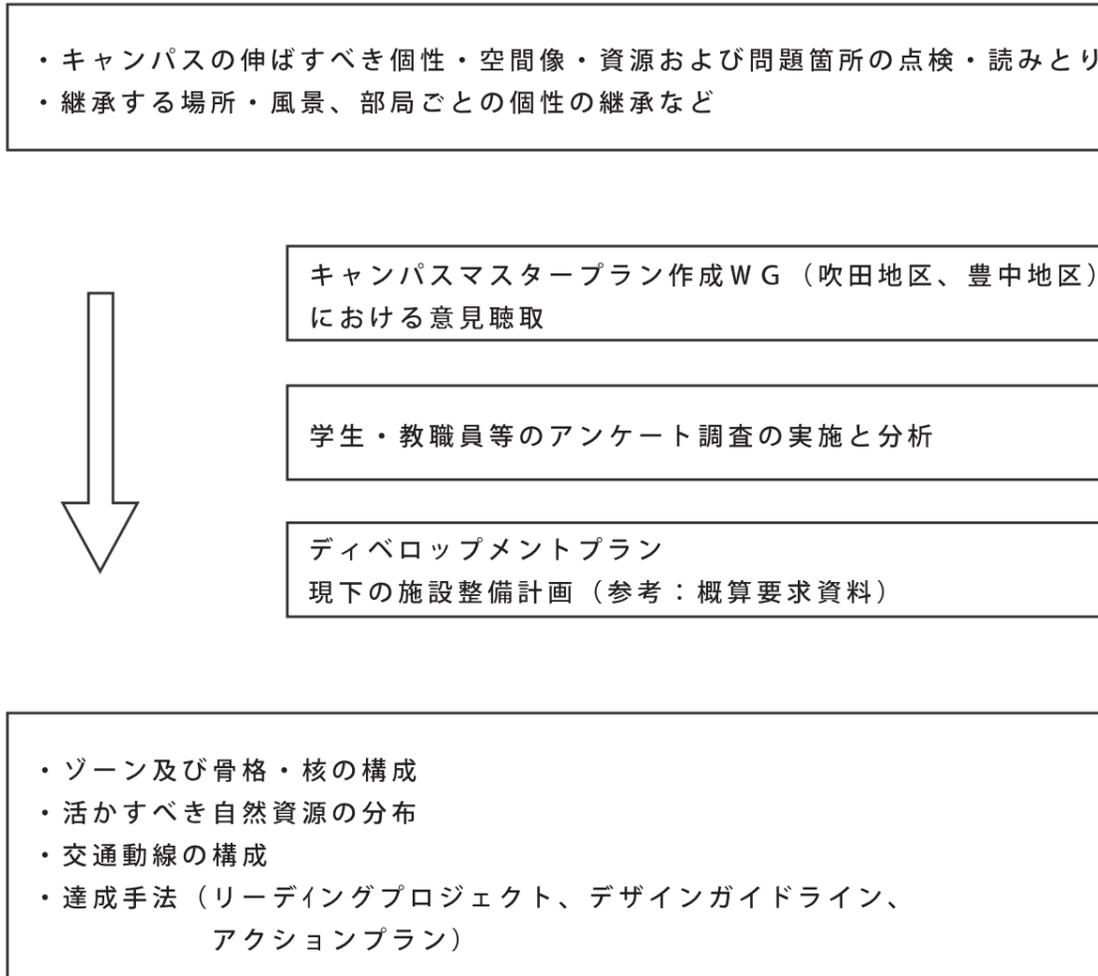
大学に通う全ての人々が魅力を感じ、また地域の人々に愛されるキャンパスをつくるために、基本的な考え方と方策をまとめる。

共用施設、共用空間に関する整備方針を示す。→ [キャンパスコモンの整備方針](#)

内容・構成

- 1) ゾーン及び骨格・核の構成
 - ① 一体として空間形成の方針を設定することが望ましいゾーンの構成
 - ② キャンパスの顔を形成する軸となる空間－メインストリート等
 - ③ キャンパスのイメージの核・シンボルとなる空間－広場、モニュメント等
 - ④ 賑わいと交流の核となる空間
 - ⑤ 副次的ストリートの良好な景観の形成
- 2) 自然を活かしたアメニティの形成
 - ① 緑地、街路樹、沿道緑化、法面緑地等の適切な造成と維持・管理
- 3) 全ての人々が安全に快適に移動できる環境の形成
 - ① 歩行者、自転車、自動車の環境
- 4) 達成手法
 - ① リーディングプロジェクト（早期整備が必要なプロジェクト）
 - ② デザインガイドライン（順次整備を進める際に身近な環境整備の指針）
 - ③ アクションプラン（美化活動などの活動計画）

マスタープラン作成の手順



・キャンパスの伸ばすべき個性・空間像・資源および問題箇所の点検・読みとり
 ・継承する場所・風景、部局ごとの個性の継承など

キャンパスマスタープラン作成WG（吹田地区、豊中地区）
 における意見聴取

学生・教職員等のアンケート調査の実施と分析

ディベロップメントプラン
 現下の施設整備計画（参考：概算要求資料）

・ゾーン及び骨格・核の構成
 ・活かすべき自然資源の分布
 ・交通動線の構成
 ・達成手法（リーディングプロジェクト、デザインガイドライン、アクションプラン）



3. 石橋門

- ポテンシャル
 - ・イ号館がアイストップとなり、庭園、待兼山の緑が目に入るロケーションで、中山池も近い。
- 現状の問題
 - ・有効幅員が狭く、警備員詰所、ポラード等諸要素が、主要な門としては貧相である。
 - ・現状では単なる通過動線であり、庭園周辺でくつろぐ人もおらず、庭園の景観が充分生かされていない。
- 整備方針
 - ・主たる歩行者の入口としてふさわしい整備をする。
 - ・現況の豊かな緑を残しながら、より人が集い、くつろげる空間に変えてゆく。
 - ・維持管理に費用がかからない形態を目指す。

2. 阪大坂

- ポテンシャル
 - ・湾曲した坂道は、ドラマチックなアプローチとなりうる。
 - ・中山池越しにイ号館までの眺望が得られる。
- 現状の問題
 - ・大学敷地内通路なのに、一般車両の通行が多く、公道のようである。
 - ・明確な歩道が整備されておらず、歩きにくい。
 - ・駐輪が多い。
 - ・カイズカイブキを主体とする植栽が荒れている。
- 整備方針
 - ・歩行者アプローチとして魅力的なものにする。
 - ・中山池からイ号館方向への眺望を生かす。
 - ・待兼山屋根とのつながりを生かす。

1. 阪大坂下

- ポテンシャル
 - ・背景に待兼山の豊かな緑を持ち、大学の顔となるべき位置にある。
- 現状の問題
 - ・旧医短跡地の利用が進んでいない。
 - ・駐輪場が荒れている。
 - ・阪大坂方向へメインアプローチらしい誘導がなされていない。
- 整備方針
 - ・新しい阪大の顔となる整備を行う。
 - ・歩行者アプローチとして魅力的なものにする。
 - ・総合学術博物館と駐輪場、一体的な計画を行う。

0. 待兼山

- ポテンシャル
 - ・豊かな里山の景観を良く残している。
 - ・阪大の主たる歩行者アプローチに近接。
- 現状の問題
 - ・旧医短跡地の利用が進んでいない。
 - ・里山の手入れが充分なされていない。
- 整備方針
 - ・博物館との一体的計画を行う。
 - ・待兼山ゾーンの核となる広場として、里山を保全しながら整備してゆく。

4. イ号館周辺

- ポテンシャル
 - ・キャンパス内で最も歴史ある建物であり、丘の上でランドマークとなっている。
 - ・中山池とセットで、阪大坂方向からの眺望の重要な要素となっている。
- 現状の問題
 - ・茂った高木群の為、歩行者動線からキャンパスの中心方面へ、また、中山池方向への見通しが悪い。
- 整備方針
 - ・新しい学生交流棟とセットでシンボル空間を創造。
 - ・中山池親水広場として整備する。
 - ・図書館方向、中山池方向への見通しの良い空間にする。

5. 共通教育前ゾーン (コミュニティゾーン)

- ポテンシャル
 - ・歩行者空間らしい整備がなされ銀杏並木が美しい。
 - ・浪高庭園など、豊かな緑に囲まれている。
- 現状の問題
 - ・駐輪が非常に多く、見苦しい上歩きにくい。
 - ・浪高庭園は樹木が茂りすぎて陰鬱な重たい空間となっており、休憩に利用する人も少ない。
 - ・中央の街路と建物との間の空間が有効に使われていない、特に言語文化研究棟北面は植栽が過剰。
- 整備方針
 - ・駐輪場を整備する。
 - ・中山池～乳母谷池の軸線を重視し、見通しよ街路として整備。
 - ・上記に伴い、浪高庭園は豊かな緑を生かしながら、くつろぎやすい空間の広がりを見通しの良さを持った庭園として整備する。

6. 図書館・サイバーメディアセンター周辺

- ポテンシャル
 - ・最重要な交通結節点であり、大通り、共通教育方面、グランド・東口方面へと動線・景観の繋がりを持っている。
 - ・図書館、食堂によって人の活気のある場所である。
 - ・図書館、サイバーメディアセンターがそれぞれ、現代的で美しいファサードを持っている。
 - ・乳母谷池が近接し、景観上取り込むことが可能。
- 現状の問題
 - ・バスがここで転回し大変危険な状況にある。他にも一般車両と人の動線交錯が著しく、危険。
- 整備方針
 - ・歩行者専用化し、イ号館前と対をなすシンボリック空間として整備する。
 - ・乳母谷池親水空間と一体整備して池の景観を生かし、中山池からの軸線も生かした整備を行う。

7. 大通り (基礎工前)

- ポテンシャル
 - ・メインストリートとして歩車分離が計られ美しく整備されている。
- 現状の問題
 - ・図書館近くで、実質上歩車分離があやふやである。
 - ・柴原口からの重要な歩行者動線が意識されていない。
- 整備方針
 - ・バスロータリーを整備し、これより北側では歩行者専用空間としての整備を行う。
 - ・将来計画の図書館旧館、文法経校舎改修において、シンボリック建物立面(ファサード)を計画する。
 - ・浪高庭園方面、図書館前方面、柴原口方面、福利ゾーン方面、それぞれへの快適な歩行者アクセスを実現する。

8. 工作センター周辺

- ポテンシャル
 - ・歩行者動線上、柴原口と大通りを結ぶ重要な位置。
 - ・建物が低層で、周辺が比較的明るい。
 - ・西向きに見ると、らふおれ(食堂)や待兼池周辺がアイストップの位置を占める。また柴原口から北向きには、基礎工学研究科新館が美しく見える。
- 現状の問題
 - ・主要な歩行者動線なのに、車のための道の様相。
 - ・工作センターが老朽化している他、プレハブや、受変電設備などが多く露出し見苦しい。
- 整備方針
 - ・主要な歩行者経路として快適な街路を形成。
 - ・現工作センター北側～柴原口は歩行者専用化する。
 - ・可能な限り緑地、広場化をはかる。
 - ・将来計画建物が歩行者街路・広場に悪影響を及ぼさないようにする。

9. 柴原口

- ポテンシャル
 - ・原子核実験施設本館以南では、歩行者専用の小径になっており、草が刈られた状態では静かで快適な、比較的見通しの良い歩行者空間になっている。
- 現状の問題
 - ・主要な歩行者動線としては有効幅員が全体に狭く、かつ空間の広がりにもネック部分があって理学部裏との景観の断絶が著しい。
 - ・草刈りなどの維持管理が行き届いていない。
- 整備方針
 - ・主要な歩行者経路として快適な街路を形成する。
 - ・駐輪場を合わせて計画する。



全体共通の問題 (デザインガイドで解決提案)

1. 図書館新館など、歩行者に圧迫感を感じさせる建物がある。
2. 歩車分離・融合が不明確な部分が多い。
3. 駐輪があふれている。
4. 植栽が過剰とも思えるほど茂ったり、道に対して過剰に重層的に存在して閉鎖感を与えている部分が多い。
5. 中庭がさびれている場所が多い。
6. 建物入口部分に人を惹きつける工夫がほしい。

10. 福利ゾーン

- ポテンシャル
 - ・人の賑わいのある空間である。
 - ・文法経校舎西側など、土地に若干ゆとりがある。
- 現状の問題
 - ・十分に歩車分離が計られていない。
- 整備方針
 - ・可能な限り歩行者街路としての快適性を高めるが、重要な車動線にもあたるので歩車分離を徹底する。
- その他全学的な現状の問題
 - ・車で常時入構出来るのが正門しか無く、その他の出入口(石橋門・柴原口以外)の運用方針が明確でない。災害時の利用などの想定が必要。

凡例

- 快適な歩行者空間または広場
- 緑地
- 池
- ランドマーク的要素
- 次項写真キープラン





01 旧医短門
豊かな緑を背に、大学の顔となるべき場所



02A 阪大坂
湾曲した坂は、ドラマチックなアプローチとなりうる。



02B 阪大坂からイ号館方向を見る
中山池とイ号館が一体となって景観を形成している。



03 石橋門
記念庭園と一体で整備されている。



04 イ号館
共通教育棟群前からもランドマークとして見える。



05A 共通教育棟群前（コミュニティゾーン）
歩行者専用空間として美しく整備されている。



05B 浪高庭園
豊かな緑を持ち、キャンパスに潤いを与えている。



06A 図書館・サイバーメディアセンター前
キャンパス内で最も賑わいがある。



06B 図書館・サイバーメディアセンター前
キャンパス内で最も賑わいがある。



07A 大通り
歩車分離され、並木と共に美しく整備されている。



07B 大通り（待兼池）
オープンスペースが整備されている。



08 工作センター周辺
キャンパス内で最も施設密度が低く、街路が明るい。



09 柴原口
草が刈られた状態では、静かで快適な歩行者空間。



10 福利ゾーン
賑わいがある空間。ある程度歩車分離もなされている。



11A 理系ゾーン
現代的な統一のイメージを前面に出している。



11B 理系ゾーン
高密度な土地利用がなされている。



12A 文系ゾーン
緑が多く、歩行者専用空間を多く持つ。



12B 文系ゾーン
建物の入口が街路からの引きを多くとっている。



13 待兼谷
緑豊かな里山の景観を良くのこしている。



14 乳母谷池・東口
豊かな緑をのこしている。

4. 里山と犬飼池

- ポテンシャル
 - ・キャンパス中央に広がる里山と犬飼池の自然は、キャンパスの重要な財産である
- 現状の問題
 - ・アクセシビリティが低く、今ある散策路も利用度合いは高くない
 - ・調整池周辺などは雑草が生い茂り、景観を損ねている部分がある
- 整備方針
 - ・里山と犬飼池及びその周辺を、自然公園として整備し、大学関係者だけでなく、周辺住民も気軽に訪れられる憩いの場所として整備する

3. キャンパスエッジの緑地帯

- ポテンシャル
 - ・キャンパスを取り囲むように広がる緑地帯は、キャンパスの景観を豊かなものにする重要な要素である
 - ・周辺住宅地に緑を提供すると共に、緩衝帯としても機能している
- 整備方針
 - ・緑地帯に対する意識を高め、積極的に保全に努める

2. 工学部ゾーン

- ポテンシャル
 - ・キャンパスのなかで最も古いエリアであり、時代を感じさせる建築群は近代建築の特徴をよくあらわしたものである
 - ・複雑に入り組んだ施設配置が多様な屋外空間を形成しており、親密感のあるオープンスペースとして活用することができる
- 現状の問題
 - ・施設、屋外共にメンテナンスが十分なされておらず、「古い=汚い」という印象を与えている
 - ・長い年月をかけて育った植栽が生い茂っており、薄暗くて入りにくい印象を与えている場所がある。また植栽部分の整備も十分でない
 - ・ただでさえ細かく分節されている屋外空間を、更に植栽で遮断していく傾向があり、一層狭苦しい印象を与えている
 - ・人が多く集えるオープンスペースが少ない
- 整備方針
 - ・施設や屋外空間の特性を踏まえた、保全・再生活用を進める。また植栽の修景にメリハリをつけ、開けるところは大きく開けて広場をつくる

5. モノレール下キャンパスエッジ

- ポテンシャル
 - ・モノレール駅下から南に広がる広大な窪地は、キャンパスの印象を大きく左右する、重要なキャンパスエッジとして位置づけられる
 - ・周辺住民の生活環境に与える影響も大きい
- 現状の問題
 - ・窪地や調整池はほとんど未整備の状態、病院の偉容やホスピタルパークとのギャップが著しい
- 整備方針
 - ・キャンパス内外の景観に配慮した整備を進める
 - ・斜面地を活かした整備を行う

6. 万博公園の存在

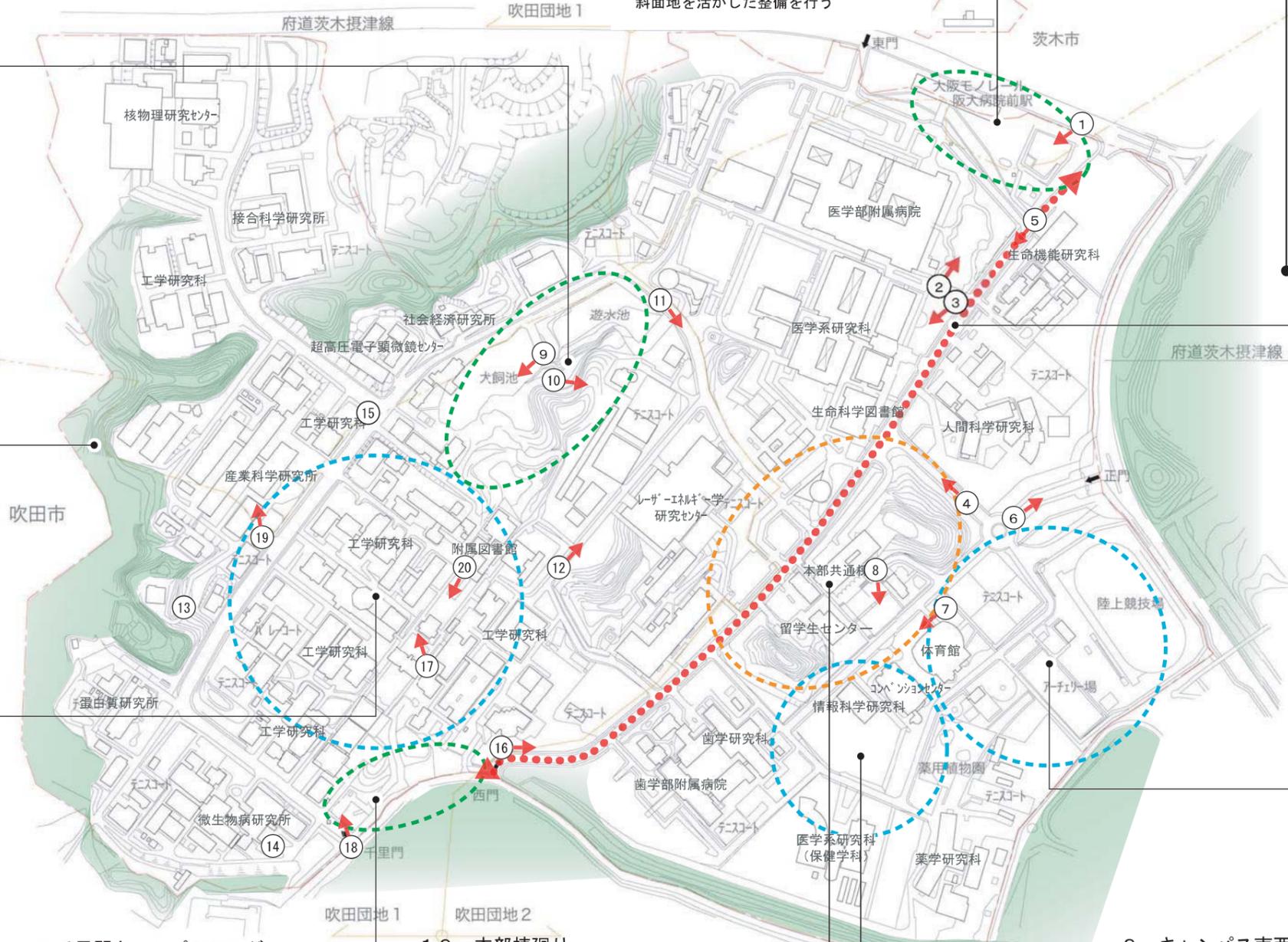
- ポテンシャル
 - ・キャンパスに隣接してEXP070の跡地があることは、吹田キャンパス独自の大きな立地特性である
 - ・自然公園の豊かな緑はキャンパスに潤いを与えてくれる
- 現状の問題
 - ・キャンパスから万博公園へのアクセスが悪い。ルートはあるのに整備が不十分で、十分活用されていない
 - ・万博公園に面したキャンパスエッジには駐車場や競技場が広がり、公園の緑をキャンパス内に取込めていない
- 整備方針
 - ・リフレッシュや来客者の案内に、気軽に万博公園へアクセスできるようなルートを整備する。また公園の緑をキャンパス内に導き入れるような景観誘導をはかる

7. 東西通

- ポテンシャル
 - ・キャンパス中央を貫く直線道路である
 - ・医学部、人科、本部、歯学部、工学部に面する
 - ・公共バスの停留所、ロータリーがある
 - ・並木、後背面の緑がほぼ連続しており、施設の壁面後退が大きくとられている箇所が多い
- 現状の問題
 - ・並木は連続しているが、後背面の整備状況が場所によってバラバラで、全体の統一感に欠ける
 - ・場所によっては廃棄物置場のバラックの建物や設備機器が道路沿いにみえたり、整備の十分でない広場・空地などがあって景観を損ねている
 - ・交差点のバンブなど、機能優先で景観に配慮されていないイメージがある
- 整備方針
 - ・メインストリート、シンボルストリートとして、景観や歩行者のアメニティに配慮した整備推進をはかる

8. 課外活動ゾーン

- ポテンシャル
 - ・競技場、体育館をはじめ、スポーツ施設が集中しているゾーンである
 - ・学部間の交流が薄いと指摘される吹田キャンパスにあって、クラブ活動を中心とした学生達の日常的な交流拠点となっている
- 現状の問題
 - ・施設や周辺環境の整備や管理が十分とはいえず荒地のような場所も見受けられる
 - ・吹田キャンパスには文化系のクラブ活動などを支援する施設がない
- 整備方針
 - ・学生のクラブ活動やボランティアを支援する施設や環境を整備し、キャンパス交流の活性化をはかる



1. 千里門キャンパスエッジ

- ポテンシャル
 - ・北千里方面におけるキャンパスの顔である
 - ・GSE棟整備との相乗効果で、飛躍的な景観向上をはかることができる
 - ・千里北公園の池と緑が隣接している
- 現状の問題
 - ・キャンパスの顔としての魅力に乏しい
 - ・調整池や駐輪場などが景観を損ねている
 - ・自転車、バイクが溢れだし、近隣に与える印象がよくない
- 整備方針
 - ・自然に囲まれたキャンパスの顔として相応しい整備を行い、自転車・バイク問題の解決をはかる

10. 本部棟廻り

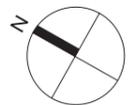
- ポテンシャル
 - ・本部棟、バスロータリー、福利厚生施設、またコンベンションセンターや体育館など、機能・交通・アメニティ、交流といった諸活動の、あらゆる面での中核施設が集中している
 - ・本部棟が建つ里山を始め、東西通りの並木やコンベンション前の芝生広場など、緑にも恵まれている
- 現状の問題
 - ・中核施設が集中しているわりには求心性が低く、全体に散漫な風景である
 - ・機能的にはキャンパスのセンターであっても、大学のシンボル空間としてのセンターとはなり得ていない
- 整備方針
 - ・吹田キャンパスのシンボル空間として、ひとつの統一的な場所、魅力あるセンターを創出する

9. キャンパス南西部

- ポテンシャル
 - ・隣棟間隔がゆったり大きく取られ、キャンパスらしい広々としたオープンスペースが確保できる
 - ・まとまった平地が開発余地として残されており、優れた計画を行うことでゾーン全体の飛躍的な魅力向上をはかることができる
- 現状の問題
 - ・ゾーン全体としては整備途上の感が強く、キャンパスとしての統一感に欠ける
 - ・屋外空間はオープンスペースというより残余空間という印象で、空地は駐車場となっている
- 整備方針
 - ・ゾーン全体を機能的、かつデザイン的にも統合するような施設計画を行い、あわせて周辺環境の整備をはかる

凡例

⑧ 次頁写真キープラン



1:6000

0 50 100 200 300 400 500m



1. 医学部付属病院
高層棟は周辺地域のランドマークとなっている



2. ホスピタルパーク
患者の憩いの空間として活用されている



3. 医学部校舎と芝生広場
古典的なデザインと芝生広場のキャンパスらしい景観



4. 生命科学図書館
正門からのアプローチのアイストップとなっている



5. 東西通り
豊かな緑に囲まれたシンボルロード



6. 正門アプローチ
常に手入れが行き届き、特別な場所となっている



7. コンベンション・体育館前
心地よい広場空間は人気の高いエリアである



8. 本部南側広場
オープンスペースの連続が広がりのある空間をつくる



9. 犬飼池の眺め
里山と池、工学部のモダニズム建築が生み出す景観



10. 里山の散策路
キャンパス中央に残された自然



11. 銀杏会館前
植栽で修景された法面が緑の壁をつくっている



12. 中通り
春には桜の並木道となる



13. 楠本会館周辺の桜
隠れた花見の名所



14. 遺伝情報実験センター横のしだれ桜
キャンパス内には、いくつかの桜の名所がある



15. 北環状通りの植栽
自主的に植えられた様々な草花が、法面を彩る



16. 西門アプローチ
緑のトンネルを上っていくようなアプローチ



17. 工学部広場
工学部エリアでは最も賑わう場所である



18. GSE棟
高層棟はキャンパス西部のランドマークである



19. 産業科学研究所
工学部のモダニズム建築群は、今も魅力を失っていない



20. 工学部中庭
工学部系の人達に安らぎの景観を与えている



キャンパスマスタープランワーキングでの主要な意見

豊中キャンパス（石橋） 日時：平成16年10月29日（金）

- ・ 理念目標は良いと思うがこの段階で配置図（整備可能なスペース）を資料として提示することは疑問である。ランドデザインを考えるにあたり大学が何を望んでいるかの議論が大切である。
- ・ 現状の人の流れ（柴原駅から）を考えると歩行者が裏道の汚いイメージのある環境を歩いている。正門は車の出入りが中心で人の流れはほとんどないのが現状である。メインストリートの整備計画が必要である。
- ・ 学生が集まる屋外の場所が少ないと思う。建物中心の計画が先行しており広場計画が欠けているように思う。
- ・ マスタープランにはここには建物を建てないで空地を残すとう計画が大切ではないか。
- ・ 施設の整備計画と同様に施設の改築計画も大切ではないか。これ以上緑地、駐車場のスペースを無くしてよいのか。
- ・ 図書の保存書庫のスペースが足りない。将来学外施設の利用も検討しなければならない。
- ・ キャンパス全体で欠けているものは何か、必要なものは何かの議論が大切。

<個別に寄せられた意見>

※健康体育部

- ・ 会議場、ゲストハウス
- ・ 旧医短跡地の活用
- ・ 運動施設の拡充
- ・ キャンパス美化、禁煙化

※基礎工学研究科

- ・ 課外活動の奨励はキャンパスライフにとって必要な視点
- ・ 500名を超える「音楽練習場所の確保」が必要

※総合学術博物館

- ・ 学術資料展示→学術標本の保存と展示
- ・ 歴史的建造物の保全→保全と活用
- ・ コミュニティ・キャンパスの実現－「ユニバーシティ・ミュージアム」（総合学術博物館の活用）追加
- ・ 両キャンパスの「自然環境の開放」
- ・ 基本計画（マスタープラン）策定のフィロソフィーを記述しないと意図が不明確
ドリームプランの実現のための基本設計とした方が理解を得られやすいと思う。

※附属図書館

- ・ 図書館の将来計画が必要
- ・ 目標に「知的財産（図書を含む）の保存」の項目追加

吹田キャンパス 日時：平成16年10月29日（金） 10:00～11:30

- ・ アンケート調査の実施など阪大のキャンパス計画もやっところまで考えるようになった。かなりの前進であり、レベルの向上が図られることが期待できる。
- ・ 学生、教職員の声をよく聞くことが大切で、学生の参加を求めたり、学生の目線でとらえてほしい、また学生の力を利用して作成することを考えてほしい。
- ・ 外部からのアイデア募集、コンペの実施等が考えられないか、またマスコミも巻き込んで作成できるような方法はないか。
- ・ 建物計画よりもキャンパスにおける道路、駐車場、駐輪場、広場、植栽、及び建物と建物を繋ぐ空間をどう構築するのが大切である。
- ・ 教育研究の施設ばかりではなく、学生、教職員の健康増進を図るような施設（ジム等）の整備も必要である。（外国の大学では整備されている）
- ・ 大学の顔となるようなものが必要であり、現在の阪大にはそのような施設がない。
- ・ 学生の溜まり場、学生が長く大学に滞在するような場の整備が必要である。また夜間に利用できる施設も大切。利用にあたっては学生のモラル教育も大切となる。
- ・ 理念目標の設定はよいことであり、これまでの計画に比べ次元が高くなった。
- ・ 大学の共通的なスペースの確保、ばらばらな施設整備にならないように、またデザインの統一を図ることが大切

<個別に寄せられた意見>

※人間科学研究科

- ・ 犬飼池周辺を公園あるいは憩いの広場に
- ・ 豊中キャンパス－千里中央－吹田キャンパス－JR茨木間の回遊バス
- ・ 民博との協調して
- ・ モノレール駅周辺の顔づくり、魅力づくり
- ・ 阪大病院前を地域住民が徒歩で進入可能な交流空間、ビオトープ回遊庭園のようにしホスピタルパークを移転する。
阪大病院前に民間の商用ビル建設が無計画になされ雑然とするに任せるよりは、阪大が駅ビル機能をもつ建物を作った方がよい。

※医学系研究科

- ・ 定年後の教授のキャンパス内での研究・教育活動の継続

アンケート調査結果の概要

キャンパスマスタープラン作成の参考とするため、平成16年10月から11月に、学生教職員、OB、周辺にお住まいの方等を対象としたアンケート調査を実施した。

1. 調査対象と回答者

- ・回答者数は364通、内訳は大学関係者が288名（80%）、それ以外が76名（20%）。
- ・平成16年度の大学関係者総数26,707人（総職員6,776人、総在学生19,931人）の内約1.4%。
- ・回答者の主な活動エリアは吹田キャンパス31%、豊中キャンパス48%、両方と回答している者は10%。吹田キャンパスでは教職員の回答者の割合が、豊中キャンパスでの割合よりも多かった。

2. 設問ごとの結果集計の概要

・設問5「キャンパスであなたが最もくつろげる場所はどこですか」

最もくつろげる場所は「図書館」や「研究室・職場」という回答が多く、「なし・ない」といった回答も多く見られる。屋外の広場や庭園に対する回答は見られず、いずれも建物内の居室をあげている。それぞれの順位は豊中、吹田、学生、教職員で若干異なる結果となっている。

・設問6「キャンパスであなたが友人や同僚と集まって過ごす場所はどこですか。」

友人や同僚と集まって過ごす場所は豊中の学生では「食堂」が最も多く、吹田の学生と教職員は「研究室・職場」という回答が多い。また教職員のほうが「なし・ない」と回答する意見が多い。ここでも屋外の空間に対する回答は見られず建物内の居室をあげている。

・設問7「あなたのお気に入りの場所・風景はどこですか。」

お気に入りの場所・風景は豊中では「サイバー」「池」「待兼山」が多く、吹田では「池」「医学部」「本部」という回答が多い。また豊中では教職員、吹田では学生が「なし・ない」と回答する意見が多い。

・設問8「キャンパスで行ってみたい場所はありますか」

設問5と同じような「図書館」、「研究室・職場」という回答が多い。

・設問9「阪大のシンボルといえば何をイメージしますか」

阪大のシンボルとしてイメージするものは「銀杏」が最も多く、次いで「医学部・阪大病院」が続くが、「なし・ない」という回答も多く見られる。大学関係者以外でも「銀杏」が最も多く「医学部・阪大病院」「イ号館」などの回答も見られる。

・設問10「阪大キャンパスを魅力的にするためには、何が重要だと思いますか」

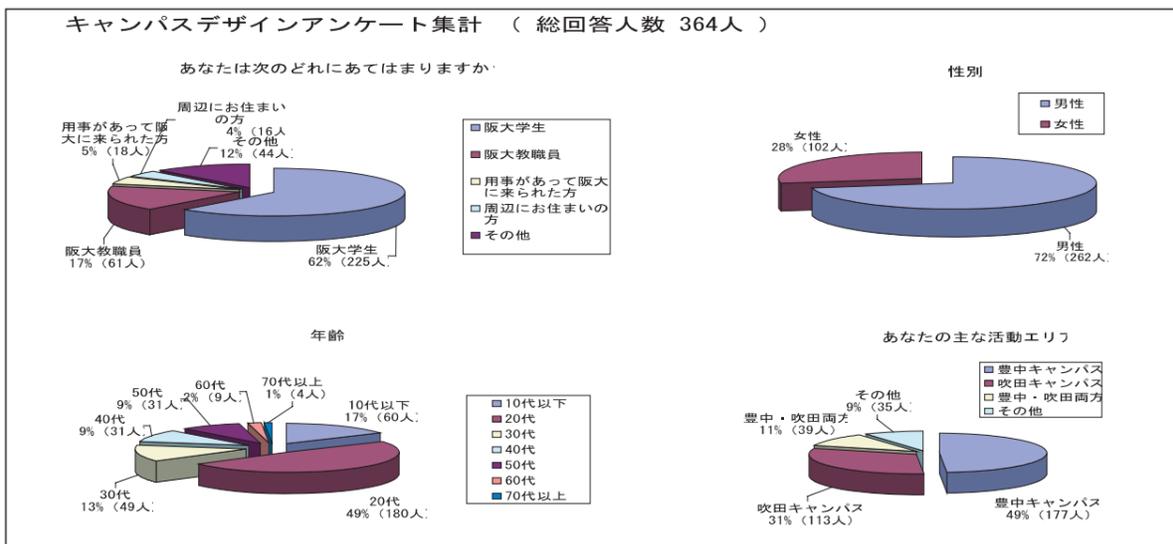
阪大キャンパスを魅力的にするために必要なものとして「芝生・広場」が全般的に最も多く、次いで「シンボル」「食堂」という回答が多い。また豊中の学生に比べて吹田の学生の方が「カフェ」「コンビニ」「生協」といった生活施設の回答が多い。

メンテナンス・マネジメントへの要求と期待

- ・施設整備の方針として、教育研究スペースの狭隘解消を最優先に建物の増設を重点に実施してきたが、食堂、トイレの充実、大学に長く居ることができるスペースの確保に関するものを除き、外部空間の充実、駐車駐輪場の整備、清掃、植栽などの維持管理に関するものが多く、従来の文教施設整備及び大学施設部サイドからはメインと考えてこなかったジャンルであった。
- ・建物の老朽化に対する不満よりも維持管理の不十分なことによる汚さや、ゴミ処理に対する苦情を指摘する意見が見られる。維持管理を担当する事務部門への不信感を表明する、一方で、使用者である学生のモラルを問う等キャンパスに対する愛着心を如何にもたせるのか、といった意見が多く見られる。

キャンパス計画への期待の全体的な傾向

- ・「キャンパスであなたが最もくつろげる場所」に対する回答で、「職場（研究室等）」、「豊中附属図書館」が多くを占めたのは、それ以外に「くつろげる場所」が阪大にいかにも不足しているかを物語っている。
- ・「阪大のシンボルといえば何をイメージしますか」に対する回答で、「イチョウ」という回答が他を圧して占めたのは、ステレオタイプ化された答えをした結果に過ぎないように思われる。2位の「医学部附属病院」、3位の「イ号館」も建築物として特に優れているわけではなく、阪大にシンボルとなるような魅力的な建物がないという事実を示している。
- ・「阪大キャンパスを魅力的にするためには何が重要だと思いますか」という回答では、「きれいでおしゃれな飲食店」が、「シンボリックな建物」、「芝生の大きな広場」を引き離しており、シンボリックな外見よりもまずはより身近で、楽しく、現実性のある環境へのベーシックな欲求を示している。
- ・それは「その他阪大について日頃感じていることについて具体的に書いてください」という回答の「食堂の充実が必要」、「憩える施設・場の整備」にも表れており、キャンパスへの最も基本的な期待であろう。
- ・「きれいでおしゃれな充実した」食堂や飲食店を実現する一方で、より大きなキャンパス空間、あるいは景観について考えねばならぬことはいまでもない。
- ・「あなたのお気に入りの場所・風景はどこですか」に対する回答では「共通教育前広場」、「イ号館からの眺め」「待兼池周辺」と意見が分かれたが、なぜそれらの場所や風景が気に入られているのか理由を確認あるいは分析する価値がある。
- ・「これからの大学に何を期待しますか」という回答に「開かれた大学」「地域との交流」といった答えが多数を占め、「威厳と風格のある大学」などの回答を大きく引き離していることも注目される。
- ・全体的に見て魅力のある場所、お気に入りの場所は的確に捉えられている。無いとう否定的な意見も多いが、ポテンシャルのある場所はそれなりによく認識されていると判断できる。そのポテンシャルを活かす工夫が必要で、そのためには**ハード整備だけではなくソフト対策も重要でありこの2点から方針策定が求められる。**
- ・魅力のある場所、お気に入りの場所は、キャンパス全体で見れば「図」として浮き上がって見える部分である。これに対して「地」としてのきめ細かい対応の重要性の指摘も多い。この範疇の意見として、「**自然を活かすこと**」、「**その状態を良好に保つべきこと**」、「**公共・共用部分のメンテナンス・清掃等を適切すること**」などがあり環境整備上は極めて重要な指摘である。





マスタープランの中核とすべき考え方（MPメンバーの解釈）

1. 長期的指針と短期的にすぐにでも取り組むべき部分の明確化

- ・土地利用計画など長期を見据えて誘導しながら取り組む部分と、すぐに着手できるもの、必要最低限として整えるべきものなど短期的な取組みを区分けして明示する。
- ・土地利用計画は、緑地、道路、駐車場・駐輪場を有効に整備する方針を明示するとともに、バラバラと建ち進むいわば乱開発を未然に防ぐための指針を示すべきである。
- ・法経講義棟のトイレが性別で分かれていないなど教育環境等して最低限のレベルに満たないものは早急に改善していく必要がある。

2. キャンパスにおける魅力の核、シンボリック空間の形成

- ・「時計台があればいい」といったコメントはステレオタイプではあるが非常に多い。それに就いて時計台を作れば良いものでもないが大学にとってシンボルとは何かという問題を深く検討する機会があってもいいように思われる。
- ・シンボリック空間というのは、①人の活動との適合、②意味性（歴史性、記念性やメッセージ性）、③形態の個性（色、形、周囲の風景とのコントラスト）、④空間の広がりこれら4要素が重要だと考えられる。

また、他の意見「くつろげる場所」「歴史・伝統・研究・先進性の表現」、「おしゃれな建物」「芝生広場」等を求める声と一体的に考えなければならない。またキャンパス全体の空間構成に則したシンボリック性をつむぎだしていく必要がある。

- ー進学希望者を惹きつけるようなキャンパスデザインが必要。
- ー大学のシンボリックな時代を感じる建物がない。
- ー実力があるのに存在感がないのは、シンボルとなるような建物施設がないから。
- ー「阪大といたら***!」という建物等が欲しい。博物館、景観を考慮した建物、イ号館のアピール。
- ー阪大文化が感じられるキャンパス。
- ーシンボルとなる建物を決め、その周りを整備する。
- ーメインストリートへの意見
 - メインストリートに面し求心力のある建物。もっと現代的に、
 - メインストリートはもっと現代的、綺麗なイルミネーションを
- ー何かシンボルになるような施設があればいいと思う。時計台ではあまりにも陳腐だが。
- ー学生だけではなく、一般の人が集うような施設や催しが欲しい。
- ー周りから見て、人が楽しそうに集まって話していたりする風景をもっと増やすこと。
- ー一般人に理解および興味をもってもらえないようなモニュメントは建てないこと。このようなことで浪費するなら、雑草整備に経費をまわすべき。
- ー吹田キャンパスは、万博記念公園と行き来をしやすくすれば、魅力が向上すると思う。
- ー「環境への配慮」をキャンパスデザインの中に表現することによって、アピール力を高める。
- ーGSEコモン高層棟 大階段での演劇やショーを見たい
- ーモノレール・キャンパスのイメージを高める。



◇イメージの骨格をつくる（パス、ノード、ランドマーク）

図となるキャンパスの構造

- 豊中キャンパス：芝原口、基礎工前ストリート、共通教育棟前歩行者空間、イ号館、阪大坂、待兼山
- 吹田キャンパス：東西通り、本部前空間、モノレール、窪地の公園化、ロータリー、体育館、コンベンションセンター、千里門

3. 交通計画の方針

- ・豊中、吹田キャンパスともに迷惑駐輪の不満が多くその原因として駐輪場の不足、学生マナーの悪さの指摘が多い。自動車に関しては入講許可規制の緩和を求める声が若年層を中心に見られる。
- ・自動車と歩行者との交錯、駐車場だらけのオープンスペースの乏しさ（身近な緑の不足）から自動車の全面的な入講禁止措置、制限を求める意見も多い。
- ・吹田、豊中キャンパスを結ぶ学内バスの利便性向上を望む声も多い。（頻度を増やす、夜間も走らせるなど）
- ・障害者の視点から学内の道路、施設のバリアフリー不備の指摘が多い。
- ・学内のアクセスも非常に閉鎖的な印象を持たれている。（入口の係員の態度、看板、ゲート、見てもわかりにくい案内図など）

(1) マスタープランへの示唆：すべての人が安全に快適に移動できる空間形成

◇施設整備

- ・自転車駐輪場の分散配置（小規模の空きスペース、地下を有効利用）
- ・自動車駐車場の周辺配置（歩行者、自転車と自動車との交錯回避）
- ・空間の機能に合わせた道路空間の再配分（知の散策路、歩道、自転車道、自転車歩行者道、車道の整備方針）
- ・バリアフリー化された道路と施設へのアクセス
- ・インフォメーションセンターの設置

◇規制

- ・自動車入講許可制度

◇啓発・教育

- ・自転車マナーの周知徹底
- ・環境教育
- ・バリアフリー教育
- ・周辺住民とのコミュニケーション

(2) 利便性の高い環境づくり

◇キャンパス間連絡バスのサービス向上

◇キャンパス内の移動、自転車の利用

◇生活機能施設の充実

(3) 多様な人の参加によるマスタープランづくり

◇学生、職員だけではなく障害者、周辺住民などの参加

4. 賑わい、交流の核の形成

- ・レストランやカフェ、コンビニ、書店などに民間企業を参入させキャンパスの品格を落とさずにうまく誘導し、福利厚生面を充実させ、周辺地域の住民も気軽に訪れるようにする。
- ・周辺地域住民には阪大の「知」に接したいという要望が強く見えることから、例えば書店には専門書を充実させ、本を座って茶を飲みながら読めるようにしたり、セミナー室等を併設して公開講座を開くなどして、地域住民がキャンパス内に滞留できる中之島センターの両キャンパス版的なものとして地域に開かれた大学をアピールする。



5. 自然資源を活かした魅力の形成

- －工学部棟の前の池には何かが生息しているとまでいわれている。あの辺りの照明の少なさ、治安の悪さからこのような噂が生じるのだらうと思う。
- －草木の手入れをするのも重要ではないか。建物ばかり見て歩いているわけではない。
- －緑が多いということ売りになっているようだが、全然緑を感じない。
- －肝心の池もごみが浮いていると意味ない。らふおれの坂付近にできた池が汚い
- －吹田キャンパスでは、犬飼池周辺の緑地、緑道はある程度の評価されている。
- －豊中キャンパスでは、待兼山への期待は高い。



◇活かすことのできる緑空間の把握

- ・大型の緑地（街路樹、路傍の低木など）はシンボリックな性格を持たせる。
- ・法面緑地、その他あいまい緑地については整備のガイドラインを作る。

特記すべき意見

1. その他、マスタープラン策定上重要な指摘項目

(1) 周辺地域との連携

- －ベッドタウンの中に佇んでいるだけでは、魅力向上に未来はないのは明らか。地域と一緒に変わって欲しい。
- －一般人の図書館などは利用できますが、セミナーなどに参加できるお知らせを出して欲しい。
- －講座の開催を参加者の立場で行って欲しい。
- －中之島センターから新しい魅力のある事柄を発信する。
- －卒業してから図書館が使えないのが不便。
- －災害時など地域社会において柔軟に対応できるキャンパス。防災拠点としての大学の機能に期待。
- －藤白台の公社住宅建て替えを契機に交流できる場所を整備。
- －現在の大学は周辺の方々からすれば公害にも似た状況だと思う。学生のマナーが悪い。
- －犬の散歩で糞害、迷惑スケボーに対処。

(2) 暮らしのセンター的施設、空間整備の必要性

- －夜8時で終る学食や、土、日は営業していない生協などあまりにも使い勝手が悪すぎる。
- －仮眠室や有料でもいいからシャワー施設ぐらいは欲しい。
- －ATMの数、会社のバラエティ

(3) 清掃、廃品回収等

- －汚すぎる。特にトイレ、ゴミの散乱、マナー向上の必要性。
- －アルミ缶を回収しているひとが普通に入出入りしているキャンパスは阪大ぐらいではないか。
- －資源ごみ窃盗問題　－クリーンdayを作って一斉掃除（月一回程度）

(4) オープンスペースに関連して、余暇施設

- －テニスコート　無用論もある。　－運動施設の管理の外注。

(5) 両キャンパスの連携

- －キャンパス一体化の意見は多い
- －吹田キャンパスに移動する学生は経済的に苦勞する。人科停留所からたまにバスに乗れない。モノレールは高い。

6) 大学の抜本的な姿勢を批判ないしその改善の必要性を指摘する意見

- －自らきれいにしようという意識がなく、誰かがやるだろうという感じ。
- －こういうアンケートがどう活かされたか伝わってこないところ－阪大らしい
- －現在の大学は周辺の方々からすれば公害にも似た状況だと思う。学生のマナーが悪い。
- －何か阪大全体がギスギスしているように感じる。
- －文系の扱いがひどい。日本学棟にトイレがなく、法経講義棟のトイレ(1F)男女の区別が完全でない。なぜ大学生になって、この年になってまで、はずかしめを受けなければならないのか？同じ学費を払っているのに不公平
- －文化の香りがしない野蛮な理科系の大学という感じがする
- －期待したところで大して変わるものではない。所詮教授というのは、自分の研究しか見えておらず、事務職員も、学生を「ただ管理する対象」としてしか考えていないのだから。
- －研究に重きを置き学生を放置、特別生産性のある人だけが育てば良いとも思える校風が原因だらうと思う。

(7) 関係者のニーズの把握とその反映、ソフト面の工夫・改善に関する意見

- －ニーズを把握してこれに応える仕組みが必要。レギュラーな意見箱の設置など。
- －個人情報問題。専攻事務で誰でも他人の成績票を事実上自由に閲覧できるようになっている。個人情報をメールに添付して回覧するとか。
- －構内出入り口の係員の対応が悪い。（外部からみればガードマンも阪大の職員）

2. その他、マスタープラン策定上重要な指摘項目

- (1) 「キャンパスが社会から隔離され、閉鎖性の強い場所になっている」「さまざまな次元で社会と融合した知の創造拠点になってほしい」というコメントは注目される。
- (2) 「象徴的建物が無い。そのことが、実力はあるにもかかわらず、世間で阪大のイメージが薄い・存在感が無いという原因の一つではないだろうか」というコメント。箱物はもういらない、という意見は最近、各方面で聞かれるが、阪大キャンパスのイメージをつくることは、常に意識しておくべきことであるように思われる。これまで、そのような意識があまりにも足りなかった。
- (3) 「現在の大学キャンパスは周辺の方々からすると公害にも似た状態だと思います」というコメント。阪大に限らないかもしれないが、現在の阪大キャンパスはそれに近い。阪大豊中キャンパス付近、吹田キャンパス付近に住むことが誇りに感じられるようなキャンパスを目指すべきだろう。
- (4) 「浪高庭園のような憩いの場であっても手入れが行き届いていないため座る気がしない。石橋門の辺りは手入れをよくしているが、ただの通り道なのでそこばかり見栄えをよくするのもどうかと思う。」この意見はキャンパス全体のバランス及び経費のかけ方その効果とのバランスについて適切に指摘している。キャンパス全体の見直しが必要でありランドスケープ・デザインの専門家の意見を聞くことや、他大学キャンパスのグループ見学等、検討が必要。
- (5) 「らふおれの坂付近にできた池が汚い」というコメント。早急に改善が必要であらう。またそのようにならない対策が必要である。
- (6) 「建物を長期的な展望でお願いしたい。（中略）法人化され自由度が増したと思いますので。」法人化による変化に期待する意見がいくつかある。
- (7) 「・・・交通が少しごちゃごちゃしている気がする。人が歩く所と車をきちんとわけ、また車道もどちらが優先でどこで一旦停止なのかとかをはっきりさせたほうが良いと思う。」あまり、市内のように過度に交通規制等され過ぎるのもいけないが混乱しているのは事実であり、交通、駐車関係は早急に根本的解決が必要に思われる。
- (8) 「統一感がない」という指摘は多い。
- (9) 「マスタープランの策定には、ぜひ障害当事者の参画をお願いしたいと思います」というコメントにはできるだけ対応すべきではないだろうか。
- (10) 「吹田キャンパスは夜間人も少なく、女性の私が一人でバス停まで歩くだけでもすごく怖い。何らかの安全対策をこうじてほしい」というコメントにもできるだけ対応すべきではないだろうか。
- (11) 「国立大だって宣伝にお金をかけたり、オシャレな大学のイメージをつくっていかないとだめなのは？もちろん勉強できる環境第一優先ですけれどね。ただ、阪大に限って言えばあまりにも地味すぎる。」
- (12) 「まず何より土地、豊中と吹田のあらゆる面での不均衡の是正、・・・」これはなかなか困難な問題だが、この点を指摘する意見はかなりある。抜本的な検討を進めるべきであるように思う。
- (13) 「文系学部の建物の薄汚れたイメージ」を指摘する意見は多い。
- (14) 「時計台があればいい」といったコメントは、ステレオタイプではあるが、非常に多く、かといって、それに添って時計台をつくれればいいものでもないが、大学にとってシンボルとは何か、という問題を深く検討する機会があってもいいように思われる。

まとめ

教職員にとってくつろげる場所や友人、同僚と過ごす場所は概ね「研究室」であり、学生では低学年は「食堂」、高学年は「研究室」と考えていること。これらの間に対して屋外空間に関してはほとんど意識されなかったことから、大学生活の基本が屋内空間を中心に行われていると考えられる。

しかし一方では、お気に入りの場所・風景については「池」「待兼山」といった自然を揚げており、キャンパスを魅力的にするためには「芝生・広場」が必要であると感じていることから、キャンパスの屋外空間の現状には満足しておらず、今後見直していきたいという積極的な意識が伺える。キャンパスマスタープランを策定していく上で、これらの結果の傾向は豊中エリア、吹田エリアでやや異なることから、同一の基準で統一するのではなく、それぞれの特性を活かしながらか進めていく必要があることを示している。さらに学生と教職員でもその意識に若干の違いが見られることにも配慮が望まれる。



5. キャンパスであなたが最もくつろげる場所

Table with 7 columns: Item, Quantity, and sub-columns for '豊中地区' and '吹田地区' (Student, Faculty, Other).

6. キャンパスであなたが友人や同僚と集まって過ごす場所

Table with 7 columns: Item, Quantity, and sub-columns for '豊中地区' and '吹田地区' (Student, Faculty, Other).

7. あなたのお気に入りの場所・風景はどこですか。

Table with 7 columns: Item, Quantity, and sub-columns for '豊中地区' and '吹田地区' (Student, Faculty, Other).

8. キャンパスで行ってみたい場所はありますか。

Table with 7 columns: Item, Quantity, and sub-columns for '豊中地区' and '吹田地区' (Student, Faculty, Other).

中之島地区
中之島センター

12. これからの大学に何を期待しますか。(阪大に限らず)

Table with 7 columns: Item, Quantity, and sub-columns for '豊中地区' and '吹田地区' (Student, Faculty, Other).

9. 阪大のシンボルといえば何をイメージしますか。

Table with 7 columns: Item, Quantity, and sub-columns for '豊中地区' and '吹田地区' (Student, Faculty, Other).

Table with 7 columns: Item, Quantity, and sub-columns for '豊中地区' and '吹田地区' (Student, Faculty, Other).

10. 阪大キャンパスを魅力的にするためには何が必要だと思いますか。

Table with 7 columns: Item, Quantity, and sub-columns for '豊中地区' and '吹田地区' (Student, Faculty, Other).

11. その他阪大について日頃感じていることについて具体的に書いて下さい。

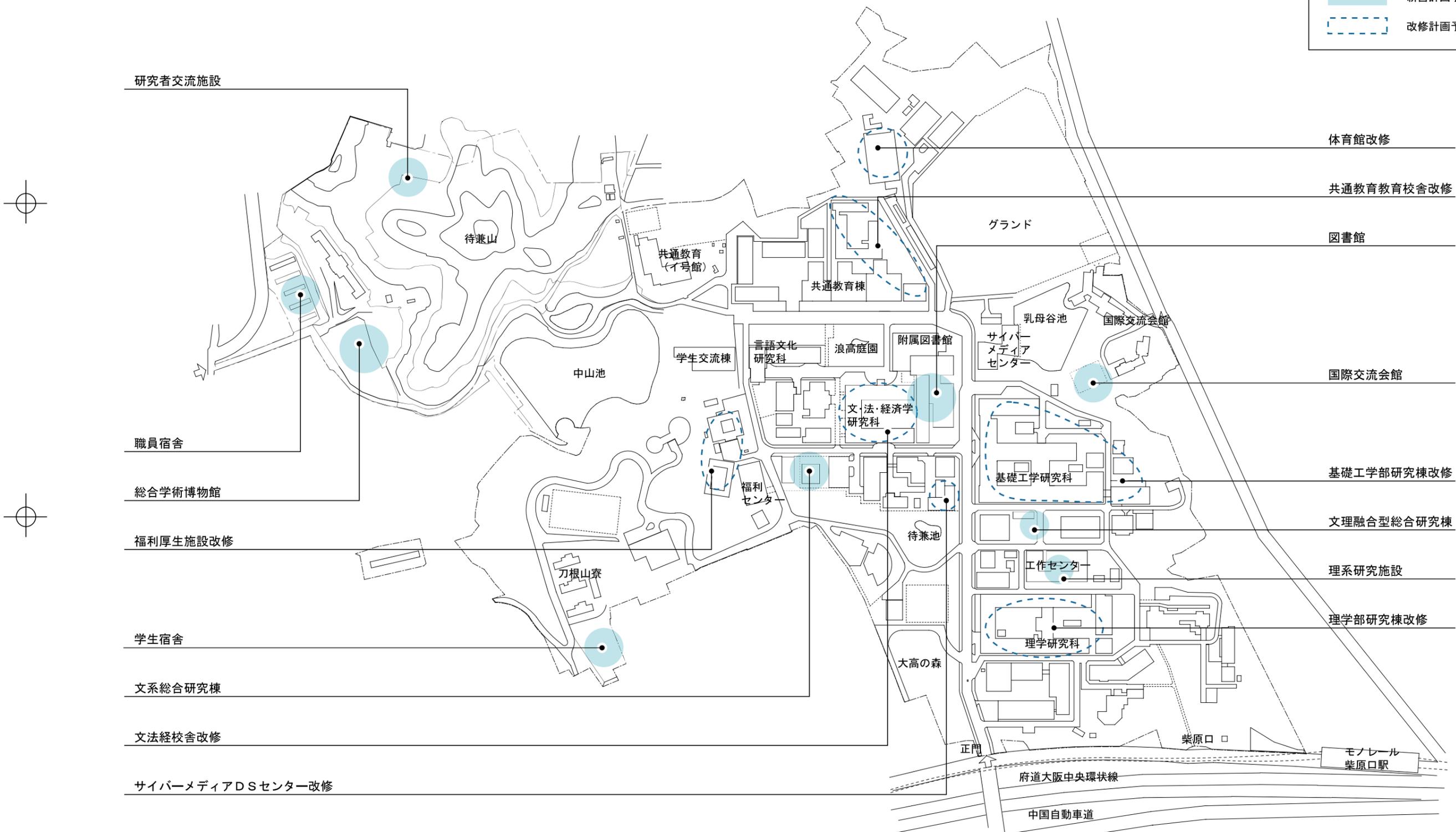
Table with 7 columns: Item, Quantity, and sub-columns for '豊中地区' and '吹田地区' (Student, Faculty, Other).

アンケート
調査結果の集計

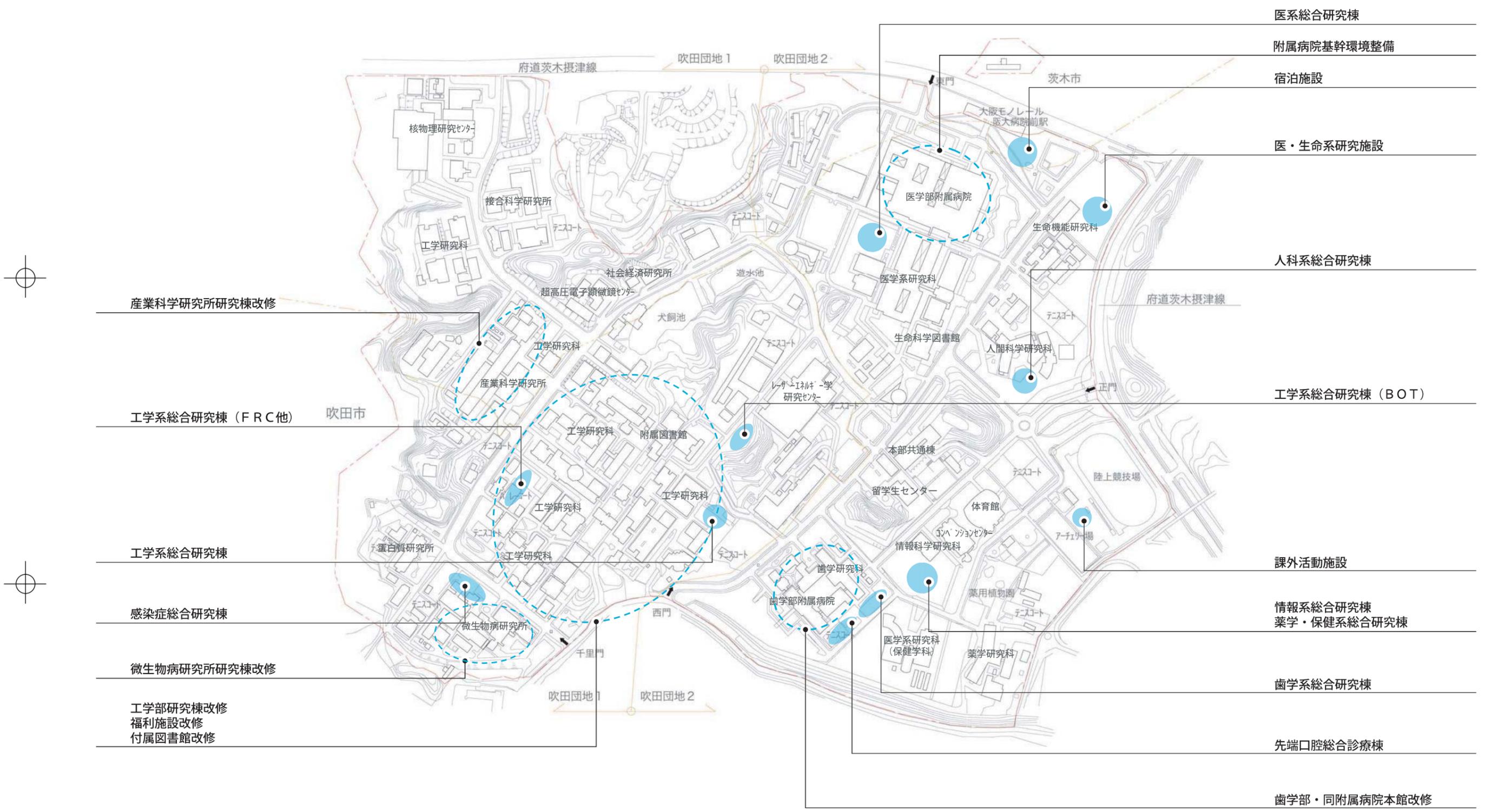


このディベロップメントプランは、「21世紀ドリーム・プラン」を基に策定された「施設長期計画」（平成12年策定）を踏襲しており、大阪大学における現下の施設整備計画を指す。
 なお、ディベロップメントプランを実現する際、新営・改修される施設の位置、形態、空間構成、デザイン等を、キャンパス全体のイメージと整合するように調整・誘導するのが本マスタープランの役割である。

凡例	
	新営計画予定エリア
	改修計画予定エリア



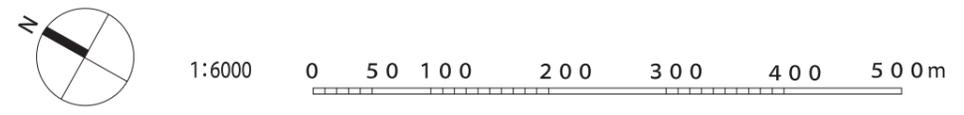
4. 2) 吹田キャンパスのディベロップメントプラン



- 医系総合研究棟
- 附属病院基幹環境整備
- 宿泊施設
- 医・生命系研究施設
- 人科系総合研究棟
- 工学系総合研究棟 (BOT)
- 課外活動施設
- 情報系総合研究棟
薬学・保健系総合研究棟
- 歯学系総合研究棟
- 先端口腔総合診療棟
- 歯学部・同附属病院本館改修

凡例

- 新営計画予定エリア
- 改修計画予定エリア



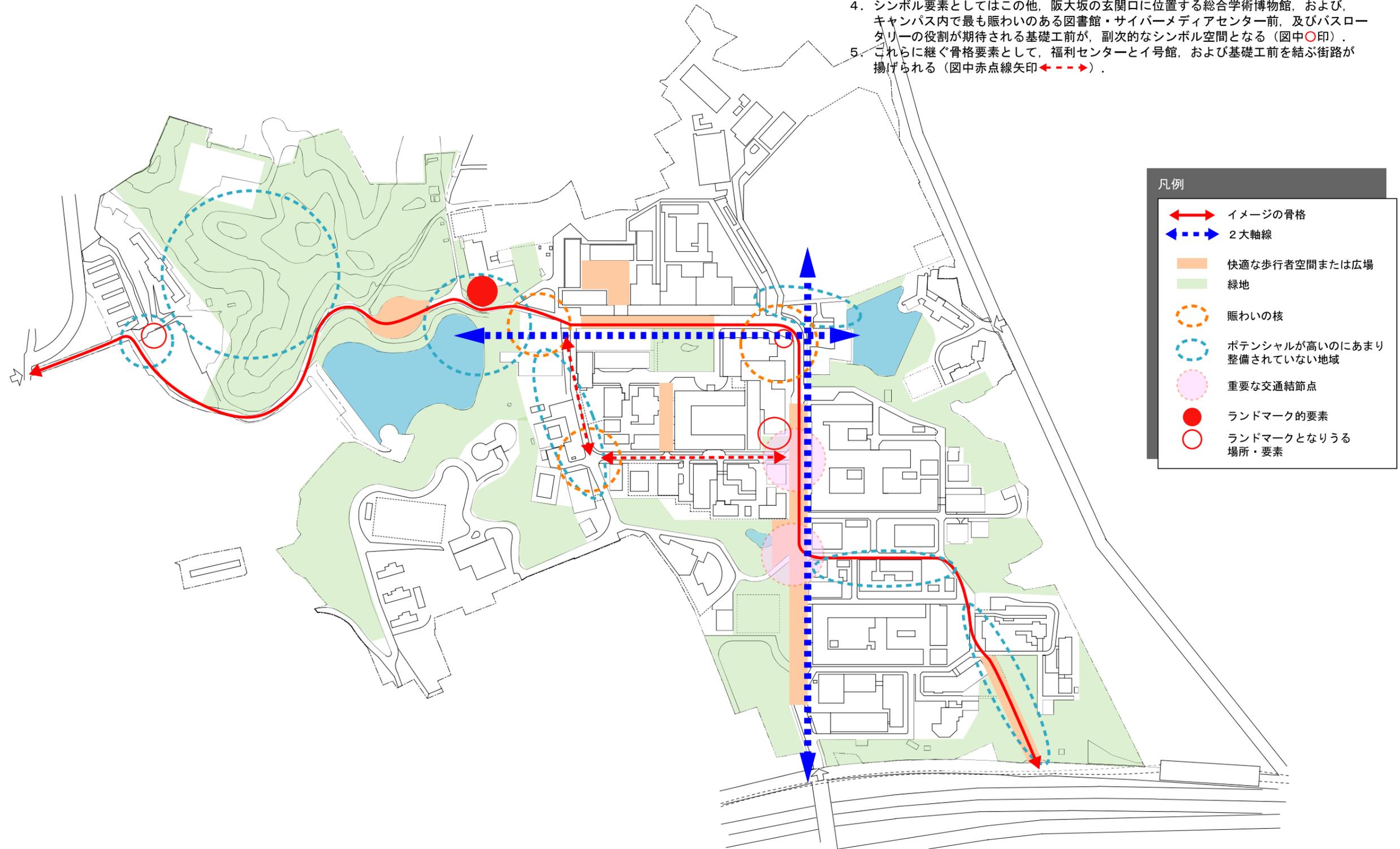


■イメージ骨格形成の方針

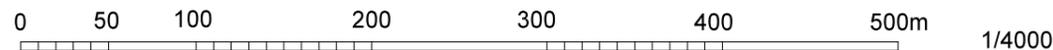
1. 前項で抽出した活かすべき資源のうち、特に「快適な歩行者空間」「緑地」に注目する。
2. これに別項で検討した「交通動線骨格」を加味する。
3. ランドマーク（イ号館）、および賑わいの核との整合を検証する。

■イメージ骨格の形成

1. 旧医短門～共通教育棟群前～大通り～工作センター周辺～柴原口（図中赤矢印 ←→ ）は一筆書き状の主要な歩行者動線であり、強いイメージ骨格をなすことが解る。
2. 一方、正門～グランドまでの大通り、および共通教育棟群前の中山池～乳母谷池までの通りは従前からのキャンパスの2大軸線（図中青点線矢印 ←- - -> ）であり上記の主要な歩行者動線と多くが重なる。
3. 現況の最も強いランドマークであるイ号館（図中赤●印）は、従来は賑わいの空間から遊離しており、キャンパスのシンボルとしての力が弱かったが、このたび完成する学生交流棟によって賑わい空間との相乗効果が期待できることとなった。
4. シンボル要素としてはこの他、阪大坂の玄関口に位置する総合学術博物館、および、キャンパス内で最も賑わいのある図書館・サイバーメディアセンター前、及びバスロータリーの役割が期待される基礎工前が、副次的なシンボル空間となる（図中○印）。
5. これらに継ぐ骨格要素として、福利センターとイ号館、および基礎工前を結ぶ街路が揚げられる（図中赤点線矢印 ←- - -> ）。



凡例	
	イメージの骨格
	2大軸線
	快適な歩行者空間または広場
	緑地
	賑わいの核
	ポテンシャルが高いのにあまり整備されていない地域
	重要な交通結節点
	ランドマーク的要素
	ランドマークとなりうる場所・要素





- 1. 阪大坂下 (旧医短門)
 - ・新しい阪大の顔となる整備を行う。
 - ・歩行者アプローチとして魅力的なものにする。
 - ・総合学術博物館と駐輪場と一体的な計画を行う。
- 2. 阪大坂
 - ・歩行者アプローチとして魅力的なものにする。
 - ・中山池からイ号館方向への眺望を生かす。
 - ・待兼山尾根とのつながりを生かす。
- 3. 石橋門
 - ・主たる歩行者の入口としてふさわしい整備をする。
 - ・現況の豊かな緑を残しながら、より人が集い、くつろげる空間に変えてゆく。
 - ・維持管理に費用がかからない形態を目指す。
- 4. イ号館周辺
 - ・新しい学生交流棟とセットでシンボル空間を創造。
 - ・中山池親水広場として整備し、憩いの空間、サークル発表、地域イベント等の為の野外ステージとしても使用できるようにする。
 - ・図書館方向、中山池方向への見通しの良い空間にする。
- 5. 共通教育前ゾーン (コミュニティゾーン)
 - ・駐輪場を整備する。
 - ・中山池～乳母谷池の軸線を重視し、見通しよい街路として整備する。
 - ・図書館旧館、文法経校舎改修にあわせて、基礎工前に至る新たな歩行者街路を計画する。
 - ・上記に伴い、浪高庭園を整備する。
 - ・浪高庭園は、豊かな緑を生かしながら、くつろぎやすい空間の広がりが見通しの良さを持った庭園として整備してゆく。

計画条件

1. 空間の骨格イメージを元に良いところを伸ばす計画とする。
2. 交通ネットワークの検討を反映する。
3. ディベロップメントプランと整合を計る。
4. 現在の駐車台数をできるだけ減らさない。
5. 柴原から歩行者動線を整備する。
6. 保全緑地、保全空地を定義する。
7. 駐車場計画との整合を計る。
8. 将来計画建物が主要な歩行者動線に悪影響を与えないように配慮する。

*豊中キャンパスは、外部空間再編の余地が比較的限定されていることから、道路、歩道、広場、保全緑地、駐車場等の配置計画を、より具体的かつ詳細に行う(凡例参照)。



その他の、または、今後の重要な検討項目

- A. 待兼谷広場整備
 - ・博物館との一体的計画を行う必要がある。
 - ・待兼山ゾーンの核となる広場として、里山を保全しながら整備してゆく。
 - ・阪大坂にかわる新たな主歩行者動線として、旧医短門から石橋門へ至る経路の一体整備を検討する。
 - ・上記のネックは、尾根高さが石橋門より6m高いことである。待兼谷と石橋門間の尾根開削や、トンネル掘削も案としては考えられる。
- B. 東口整備およびその他緊急用出入口 (図中▲)
 - ・現状では常時車が入構出来るのは正門だけであり災害等の緊急時の対応に問題がある。
 - ・東口からの車出入口整備を検討する。但し十分な環境、景観、安全上の検討が必要である。
 - ・イ号館裏口、刀根山寮裏口、極限化学センター裏口の緊急用、その他用出入口の役割を明確にする。
 - ・上記は、十分な近隣への配慮、折衝が必要である。
- C. 文系ゾーンを南北に貫く新街路設定
 - ・食堂(どんどん)と新文法経総合研究棟の間の、現駐車場部分を、らふおれ前までつながる歩行者街路として整備することも考えられる。

デザインガイドライン

1. 将来計画建物が、歩行者動線や景観、広場に悪影響を与えない為のボリュームの考え方を示す。(日影、D/H)
2. 歩車道の考え方を街路特性に応じて示す。
3. 駐輪場分散配置(一部は集中配置)の考え方を示す。
4. 植栽の、街路との関係性や方針を示す。
5. 中庭(将来新規・改修)の方針を示す。
6. 建物入口と街路の関係性や方針を示す。

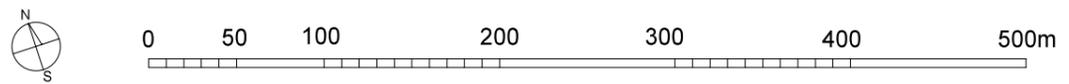
- 10. 福利ゾーン
 - ・可能な限り歩行者街路としての快適性を高めるが、重要な車動線にもあたるので歩車分離を徹底する。

- 11. 共通教育棟群裏道路整備
 - ・交通動線の整理上、非常に重要である。
 - ・石垣、地山を切り崩す必要があり、大がかりな工事になる。



凡例

- 主な道路(車道)
- 歩行者専用街路・歩道
- 計画広場・保全空地
- 保全緑地
- 計画立体駐車場
- 駐輪場(大規模なもの)
- ディベロップメントプランでの計画建物
- 主要な並木
- ▲ 緊急時車両入構口



1/4000

- 5
- ・散策路を拡張してアクセシビリティを高める
 - ・平地にポケットパークを整備する
 - ・遊水池および周辺の景観を整備する

計画条件

1. 空間の骨格イメージを基に良いところを伸ばす計画とする。
 2. ディベロップメントプランとの整合を計る。
 3. 屋外平面駐車場の一部を立体駐車場に移行し、跡地を広場・緑地等のオープンスペースに転用していく。
 4. 保全緑地、保全空地を定義する。
 5. 周辺地域の景観に配慮したキャンパスエッジの整備を行う。千里門周辺は来訪者を受け止める大学の顔としてリニューアルを進める。万博公園側は、公園へのアクセシビリティを高める整備を行う。
- * 吹田キャンパスは、外部空間再編の余地が比較的多く残されていることから、道路、歩道、広場、保全緑地等の配置計画は、空間の連結の方向性や再編の場所の指定など、空間構造の全体的な枠組みを提示する（凡例参照）。

- 4
- ・図書館とGSE棟に挟まれたオープンスペース帯は、植栽を減らして人が集まれる広場として整備する
 - ・GSE高層棟の大階段から図書館のアプローチまで一体的な景観を創出する

- 3
- ・福利厚生施設を建て替え、外部に開かれたオープンな空間づくりを行う
 - ・歩行者専用路を一体的に整備する

今後の重要な検討項目

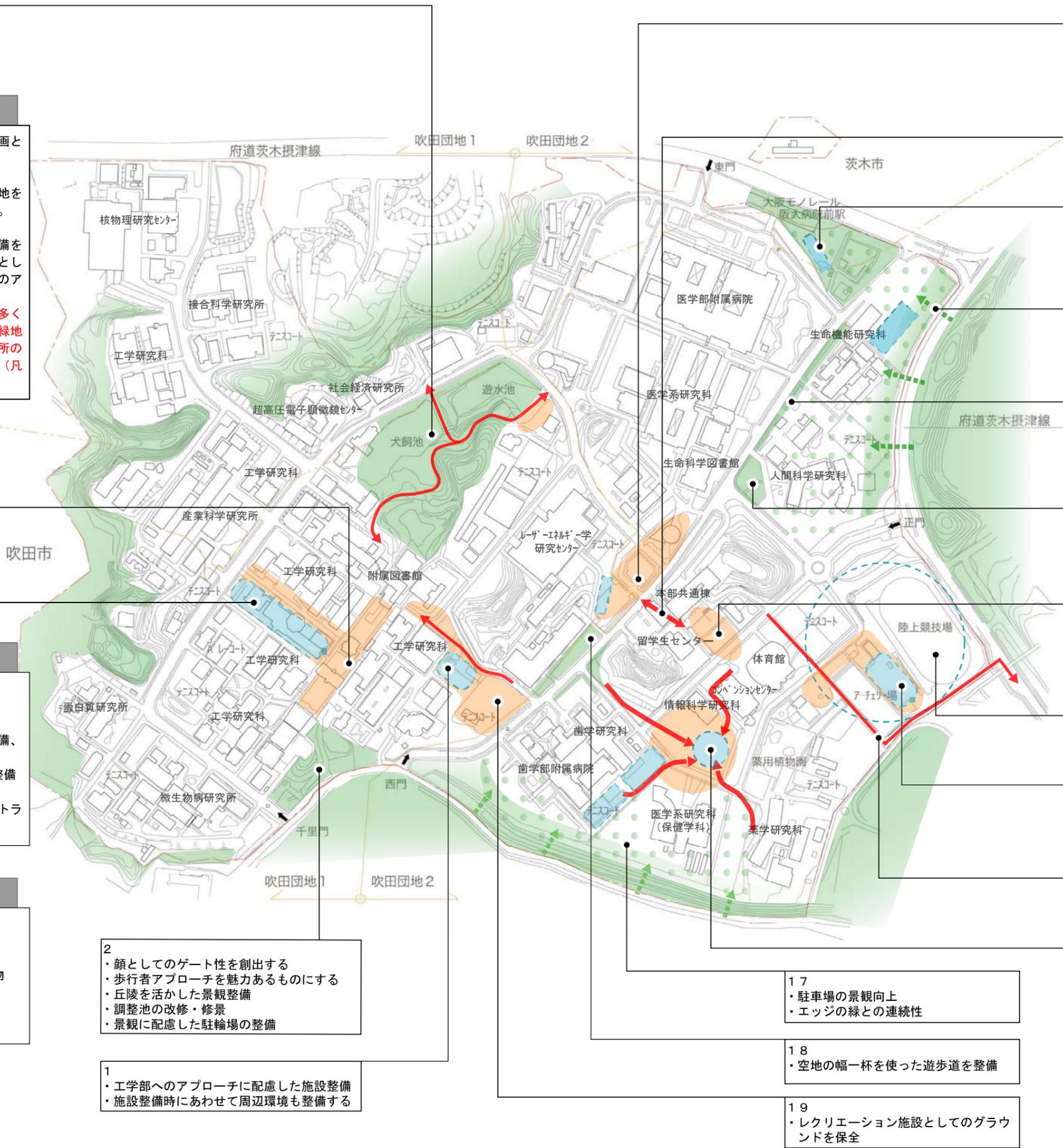
- A. 立体駐車場の規模設定・整備場所の検討
- B. 宿泊施設の規模設定・整備場所の検討
- C. モノレール周辺地区の整備
調整池の人工地盤整備、宿泊等福利厚生施設の整備、キャンパスエッジとしての景観形成
- D. キャンパスコア（事務局棟・バスロータリー）に整備すべき施設の検討
宿発施設、コミュニケーション棟、カフェ、レストラン等

凡例

- （オレンジ色塗り） オープンスペース（広場・緑地等）の再編・整備
- （青い線） ディベロップメントプランでの計画建物街路・広場等による空間の連結
- （赤い線） アクセシビリティの強化

- 2
- ・顔としてのゲート性を創出する
 - ・歩行者アプローチを魅力あるものにする
 - ・丘陵を活かした景観整備
 - ・調整池の改修・修景
 - ・景観に配慮した駐輪場の整備

- 1
- ・工学部へのアプローチに配慮した施設整備
 - ・施設整備時にあわせて周辺環境も整備する



- 6
- ・駐車場を移設し、シンボル広場として整備する
 - ・コンビニやカフェを誘致してアメニティを高める
 - ・モニュメントの設置

- 7
- ・車庫と周辺の駐車場を移設し、本部棟の北側と南側の一体化をはかる

- 8
- ・ホスピタルパークの拡張整備
 - ・里山再生整備
 - ・宿泊施設（簡易ホテル、ゲストハウス）の整備

- 9
- ・駐車場の景観向上
 - ・万博の緑との連続性
 - ・キャンパスエッジの景観に配慮した施設計画

- 10
- ・並木の後背地の植栽整備をはかる
 - ・付属施設や設備機器などは、メインストリートの景観に配慮した整備を行う

- 11
- ・メインストリートに対して開かれたオープンスペースとして整備する

- 12
- ・敷地の段差を活かした広場を整備（イベント広場等）

- 13
- ・陸上競技場やアーチェリー場の維持・管理、メンテナンスの向上をはかる

- 14
- ・クラブハウス等の整備（運動系、文化系、ボランティア活動等）
 - ・交流空間としてのオープンスペース整備

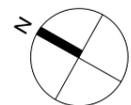
- 15
- ・万博へのアプローチを兼ねた遊歩道の整備

- 16
- ・求心性の高い建築デザイン
 - ・福利厚生施設の整備
 - ・福利厚生施設に面した広場の整備
 - ・周辺オープンスペースの一体的な整備

- 17
- ・駐車場の景観向上
 - ・エッジの緑との連続性

- 18
- ・空地の幅一杯を使った遊歩道を整備

- 19
- ・レクリエーション施設としてのグラウンドを保全



1:6000 0 50 100 200 300 400 500m



6-1. 豊中キャンパスにおける自然資源の継承と形成

アカマツ、クスギ、コナラを中心とした樹木で各所に森が形成され、待兼山を中心としてよく里山の景観が残されていると言われる。

しかしこれらの多くは維持管理がなされていないため、鬱蒼と茂って底部に光が届かない状態になっている。一方で50周年記念庭園に代表される庭園は大変美しく整備されているものの、鑑賞するための庭園の性格が強くなり、人が中に入ってくつろぐようには作られていない。

また、充分草刈りが行われていない柴原口のような部分もあり、緑地の保全を図ることと同時に、これらの維持管理の段階・性格付けを明確にして、維持管理の効率化と良好な景観形成を、キャンパス全体の中でバランスをとってゆく必要がある。

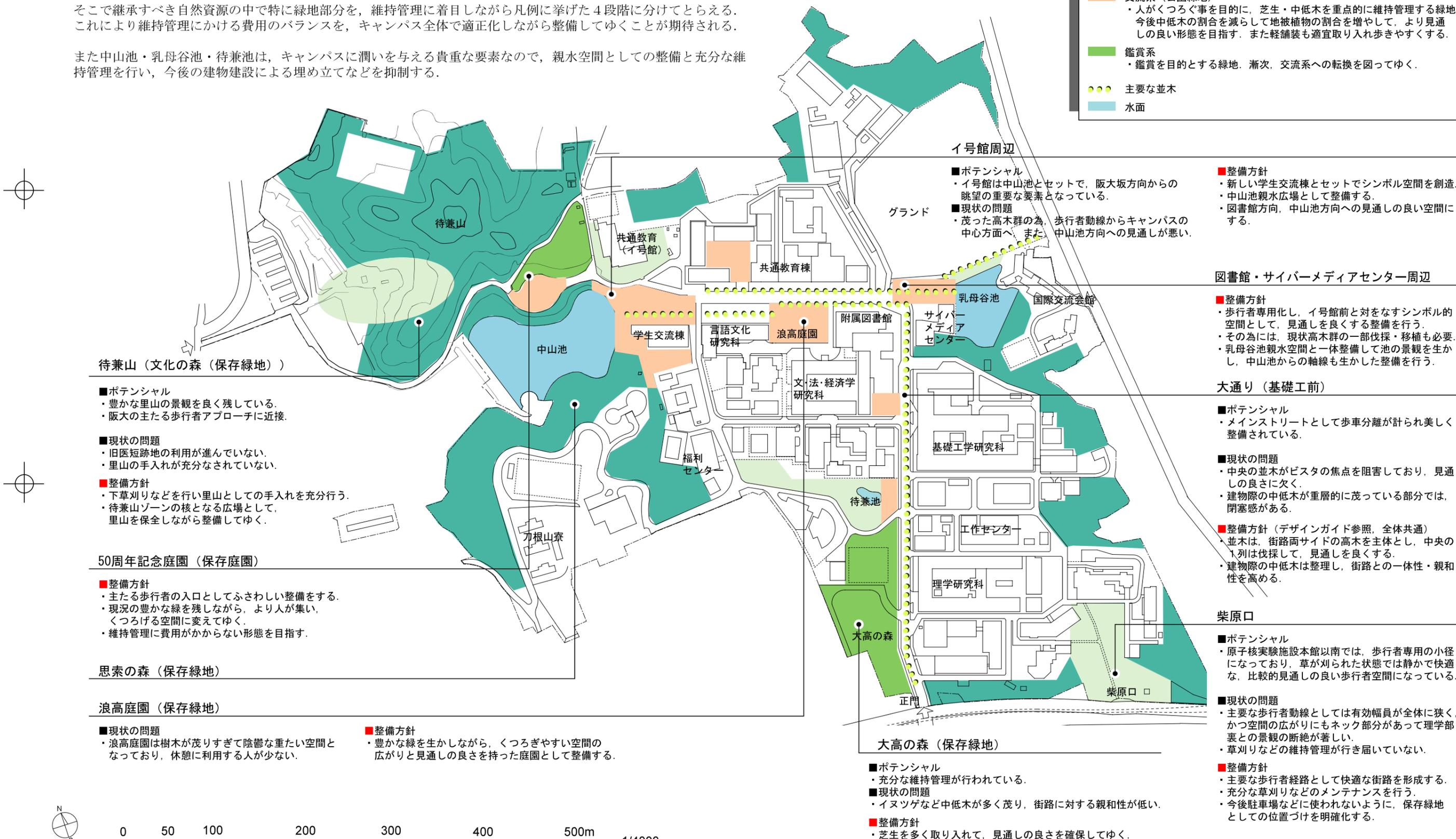
そこで継承すべき自然資源の中で特に緑地部分を、維持管理に着目しながら凡例に挙げた4段階に分けてとらえる。これにより維持管理にかかる費用のバランスを、キャンパス全体で適正化しながら整備してゆくことが期待される。

また中山池・乳母谷池・待兼池は、キャンパスに潤いを与える貴重な要素なので、親水空間としての整備と十分な維持管理を行い、今後の建物建設による埋め立てなどを抑制する。

<注>「芝生」の表現について
本マスタープランでいう「芝生」とは和芝やヘデラ、タマリユウや苔類など、地被植物全般をさす。今後の各部検討にて適宜選択して、見通しの良い、あるいは広がりのある空間・緑化計画を行うものとする。

凡例<緑地のヒエラルキーの考え方>

- 準自然系
 - ・基本的に人の手を入れない、ゴミを取る・茂りすぎた樹木の伐採など最低限の維持管理のみを行う緑地・森。
- 散策系（下草緑地）
 - ・芝生<注>など地被植物を主体とし、維持管理としては草刈りのみを充分に行う緑地。
- 交流系（公園緑地）
 - ・人がくつろぐ事を目的に、芝生・中低木を重点的に維持管理する緑地。今後中低木の割合を減らして地被植物の割合を増やして、より見通しの良い形態を目指す。また軽舗装も適宜取り入れ歩きやすくする。
- 鑑賞系
 - ・鑑賞を目的とする緑地。漸次、交流系への転換を図ってゆく。
- 主要な並木
- 水面



待兼山 (文化の森 (保存緑地))

- ポテンシャル**
 - ・豊かな里山の景観を良く残している。
 - ・阪大の主たる歩行者アプローチに近接。
- 現状の問題**
 - ・旧医短跡地の利用が進んでいない。
 - ・里山の手入れが充分なされていない。
- 整備方針**
 - ・下草刈りなどを行い里山としての手入れを充分行う。
 - ・待兼山ゾーンの核となる広場として、里山を保全しながら整備してゆく。

50周年記念庭園 (保存庭園)

- 整備方針**
 - ・主たる歩行者の入口としてふさわしい整備をする。
 - ・現況の豊かな緑を残しながら、より人が集い、くつろげる空間に変えてゆく。
 - ・維持管理に費用がかからない形態を目指す。

思索の森 (保存緑地)

浪高庭園 (保存緑地)

- 現状の問題**
 - ・浪高庭園は樹木が茂りすぎて陰鬱な重たい空間となっており、休憩に利用する人が少ない。
- 整備方針**
 - ・豊かな緑を生かしながら、くつろぎやすい空間の広がりが見通しの良さを持った庭園として整備する。

イ号館周辺

- ポテンシャル**
 - ・イ号館は中山池とセットで、阪大坂方向からの眺望の重要な要素となっている。
- 現状の問題**
 - ・茂った高木群の為に、歩行者動線からキャンパスの中心方面へ、また、中山池方向への見通しが悪い。

■整備方針

- ・新しい学生交流棟とセットでシンボル空間を創造。
- ・中山池親水広場として整備する。
- ・図書館方向、中山池方向への見通しの良い空間にする。

図書館・サイバーメディアセンター周辺

■整備方針

- ・歩行者専用化し、イ号館前と対をなすシンボリック空間として、見通しを良くする整備を行う。
- ・その為には、現状高木群の一部伐採・移植も必要。
- ・乳母谷池親水空間と一体整備して池の景観を生かし、中山池からの軸線も生かした整備を行う。

大通り (基礎工前)

■ポテンシャル

- ・メインストリートとして歩車分離が計られ美しく整備されている。

■現状の問題

- ・中央の並木がビスタの焦点を阻害しており、見通しの良さに欠く。
- ・建物際の中低木が重層的に茂っている部分では、閉塞感がある。

■整備方針 (デザインガイド参照、全体共通)

- ・並木は、街路両サイドの高木を主体とし、中央の1列は伐採して、見通しを良くする。
- ・建物際の中低木は整理し、街路との一体性・親和性を高める。

柴原口

■ポテンシャル

- ・原子核実験施設本館以南では、歩行者専用の小径になっており、草が刈られた状態では静かで快適な、比較の見通しの良い歩行者空間になっている。

■現状の問題

- ・主要な歩行者動線としては有効幅員が全体に狭く、かつ空間の広がりにもネック部分があるため理学部裏との景観の断絶が著しい。
- ・草刈りなどの維持管理が行き届いていない。

■整備方針

- ・主要な歩行者経路として快適な街路を形成する。
- ・充分な草刈りなどのメンテナンスを行う。
- ・今後駐車場などに使われないように、保存緑地としての位置づけを明確化する。

大高の森 (保存緑地)

■ポテンシャル

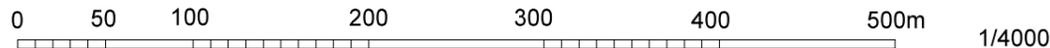
- ・充分な維持管理が行われている。

■現状の問題

- ・イヌツゲなど中低木が多く茂り、街路に対する親和性が低い。

■整備方針

- ・芝生を多く取り入れて、見通しの良さを確保してゆく。



7-1. 2) 豊中キャンパスの交通ネットワーク (その2)

前項の検討の中から有力なものを整理統合して、東口の出入りを重視する方向で再検討を行ったものが下表である。前頁で述べた通り、現状では車で常時入構出来るのが正門だけであり、災害等の緊急時の対応に問題がある。東口は最も有力な第二出入口の候補である（他の出入口は近隣への影響が大きいと予想される）。なお2'案と12'案は同点であるが、2'案は第二出入口問題のため最有力案とはしない。また以下に示す通り、当面は実現性・柔軟性のある12'案を目指し、将来的には安全性や歩行者への配慮を最重視した13案を目標とすることが妥当である。

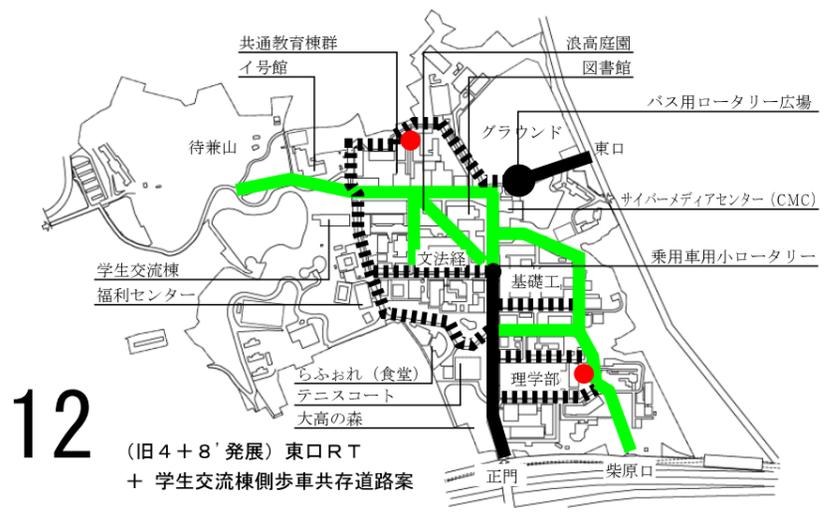
豊中キャンパス/交通ネットワーク形態比較表 (その2)

項目 \ 案	0. 現状の動線骨格	2'. 環状道路 + 基礎工前RT案	12. 東口RT + 学生交流棟側歩車道案	12'. 東口 + 基礎工前RT案	13. 東口RT + イ号館裏出入口案	備考
ダイアグラム						
安全性 動線交錯度合、歩車分離等のスムーズ性	図書館、OMC周辺 ×× 双方方向通行、バス転回 学生交流棟周辺 × 双方方向通行 理系裏へ柴原口 △ 一方通行	× 双方方向通行 ○ 歩行者専用化 ○ 多くの部分を歩車化	○△ グラウンド間のみ分断される × 双方方向通行 ○ 多くの部分を歩車化	○△ グラウンド間のみ分断される × 双方方向通行 ○ 多くの部分を歩車化	○△ グラウンド間のみ分断される ○ 歩行者専用化 ○ 多くの部分を歩車化	
既設駐車場	現状台数の維持 最大限確保 使い勝手車の動線 ○	○ 多くの部分を維持可能 △ 一方通行、動線長い	○ 多くの部分を維持可能 △ 一方通行、動線長い	○ 多くの部分を維持可能 △ 一方通行、動線長い	○ やや減少する △ 共通教育棟動線長い	言語文化周辺の既存駐車場が分かれ目
オープンスペースの広がりや景観 および主な歩行者動線の景観	共通教育棟前大通り、浪高庭園周辺が代表的だが、駐輪や鬱蒼とした緑で広がり感欠く。図書館前が圧迫感大	×	○	○	○	◎
グラウンドの利便性 (削られる程度や動線など)	図書館前の動線交錯が著しい	× 動線交錯	△	×	△	×
実現が難しい箇所 (費用面を含む)	(現状のまま)	○ 共通教育棟裏道路	△	× 共通教育棟裏道路	△	×
総合評価 上記評価の平均点(参考) (各評価項目の重みは均等と仮定)	0.0	× 0.6	○ 0.2	△ 0.6	○ 0.4	△
備考		・正門以外に車の常時出入り口が無いのが問題。		・柔軟性に富む案である。	・東口整備問題、駐車場台数の問題。イ号館裏出入口問題の3点が解決すれば、理想型となりうる。 ・バスRTを正門側とすれば、左記12'案と同点になる。	前頁の比較に対し以下項目削除 ・バスルート ・立体駐車場 ・費用(現実性に含める)

<凡例>

- 歩行者専用道 <注1>
- 車の幹線道路 (バス道路+歩道)
- 歩車共存 (可能なかぎり一方通行+広い歩道)
- ロータリー広場 (バス転回、略称RT)
- 立体駐車場候補地 <注2>

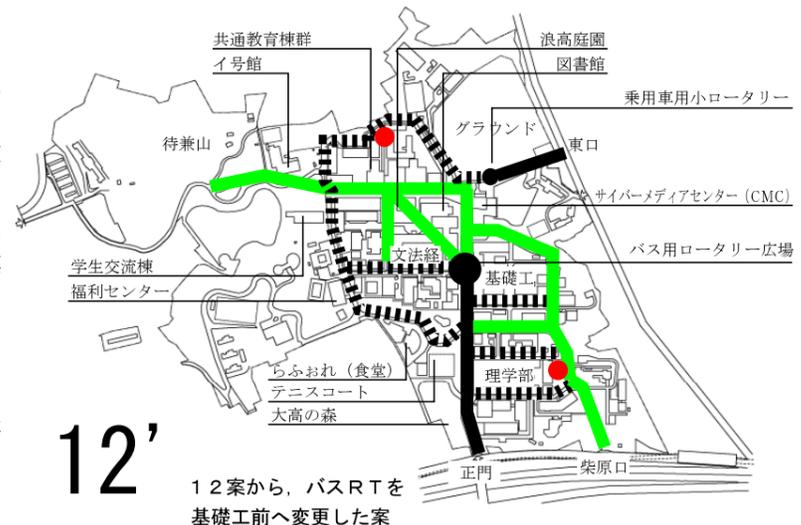
注1: サービス車等は通行可能とする。
注2: 立体駐車場の計画は、豊中キャンパスにおける自動車通勤のあり方や必要収容台数を定めた上で、規模等を設定する必要がある。



本案(12'案)は、図書館周辺の歩行者専用化と、現状駐車場台数を出来るだけ維持することを計りながら、東口の車入構を緊急時対応として重視した案である(12案に対しバス入構を正門側として、東口の簡易化も意図している)。

但し、東口の整備は高低差解消の為に長大な斜路を必要とし大規模な工事となる。従って今後継続して、安全・景観・近隣に対するアセスメントを行う必要がある。

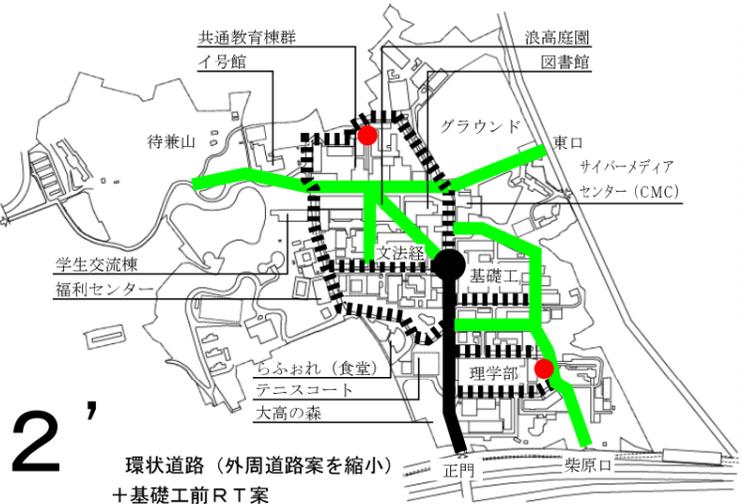
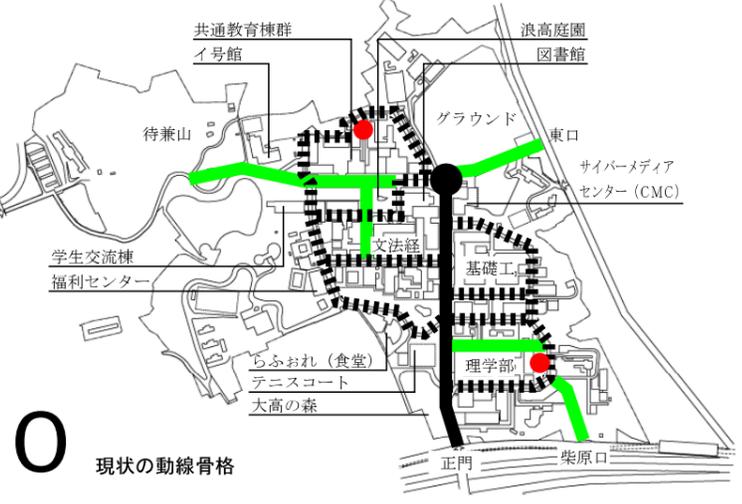
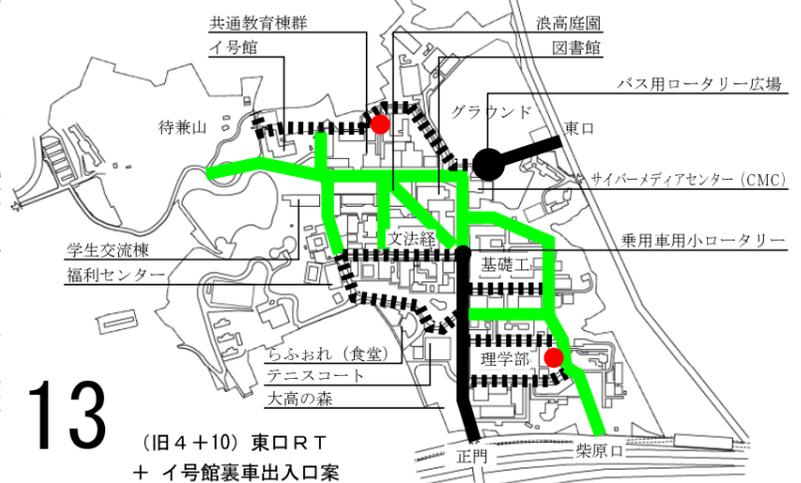
しかし本案は、東口整備未了でも実用的であるので、柔軟性・現実性を考慮すれば、当面目指すべき最有力の案だと言える。



本案(13案)は、車の入構を歩行者専用空間によって南北に完全に分断する案である。

12'案における石橋口側の歩行者・車の交錯が、13案では解消される。安全性や歩行者への配慮を最重視すれば本案が理想型であるが、東口整備問題、駐車場台数の問題、イ号館裏出入口問題の3点を解決しなければ実現出来ない。

以上により、当面は現実性の高い案(12'案)を目指し、長期的には理想案(13案)を目標に整備を進めることが妥当であると言える。





現状の課題

実践センターと文法経校舎に囲まれたオープンスペースは、共通教育棟、図書館、浪高庭園、食堂などが近接する公共性の高いエリアであり、大阪大学でも最も賑わいのある空間となっている。また、両端に中山池と乳母谷池が隣接し、両池との視覚的つながりや、親水性を確保することにより、大学のシンボルとして相応しい環境に生まれ変わるポテンシャルを有している。しかしながら、現状は、大量の駐輪、鬱蒼とした庭園、図書館による圧迫などの問題が顕在化しており、シンボル空間形成の可能性が活かされていない。

計画の方針

オープンスペースの再編、浪高庭園の整理、代替駐輪場の整備、建物とオープンスペースとの関係の改善により、シンボル空間としての質を総合的に形成していく。

● 乳母谷池側の親水性の改善

池の水際に、テラスやデッキなどを設けて、池をながめたり、憩うことのできるスペースをつくる。

(中山池側は学生交流棟整備により改善済み)

● グランドコーナー部分の整備

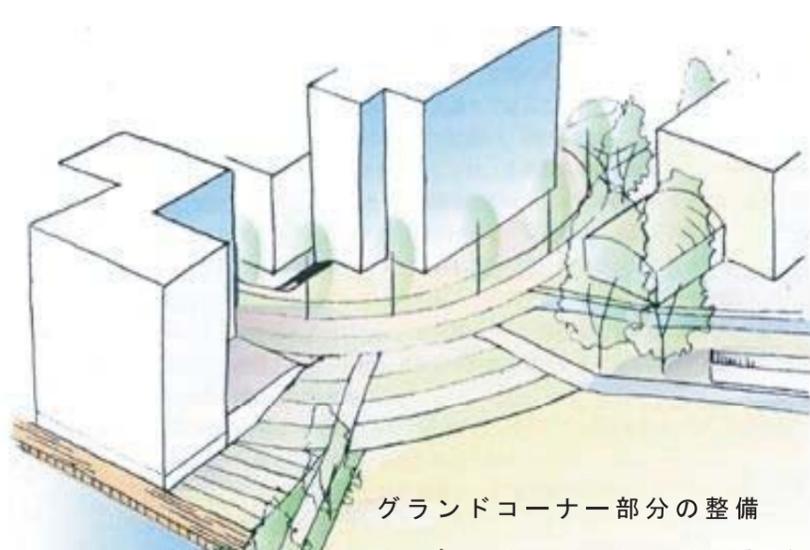
東西と南北の幹線街路が会う重要な結節点であり、視線がグランド側に開ける場所でもあるため、オープンスペースネットワークの重要なポイントとして、広場化する。モニュメント設置場所の有力な候補。

● 現駐輪スペースの代替駐輪場を整備

オープンスペース中央にある、現在の駐輪スペースを解消し、校舎側に駐輪場を代替する。

● 浪高庭園の再生

芝生等に再整備することにより、人が入り、集い憩えるスペースとする。



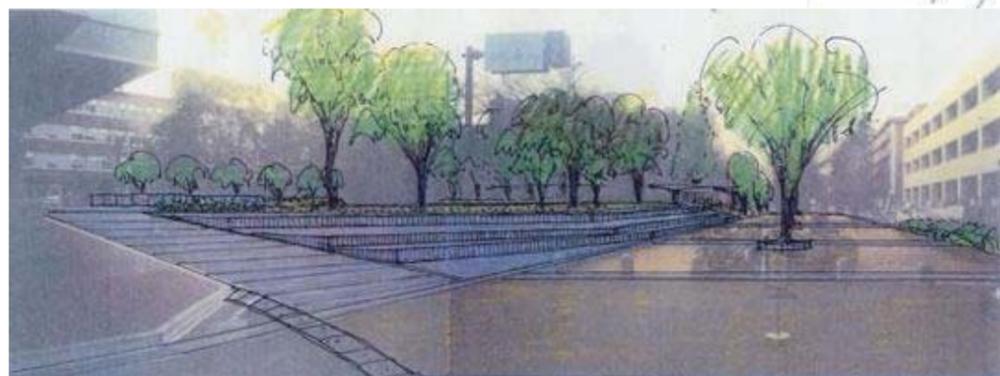
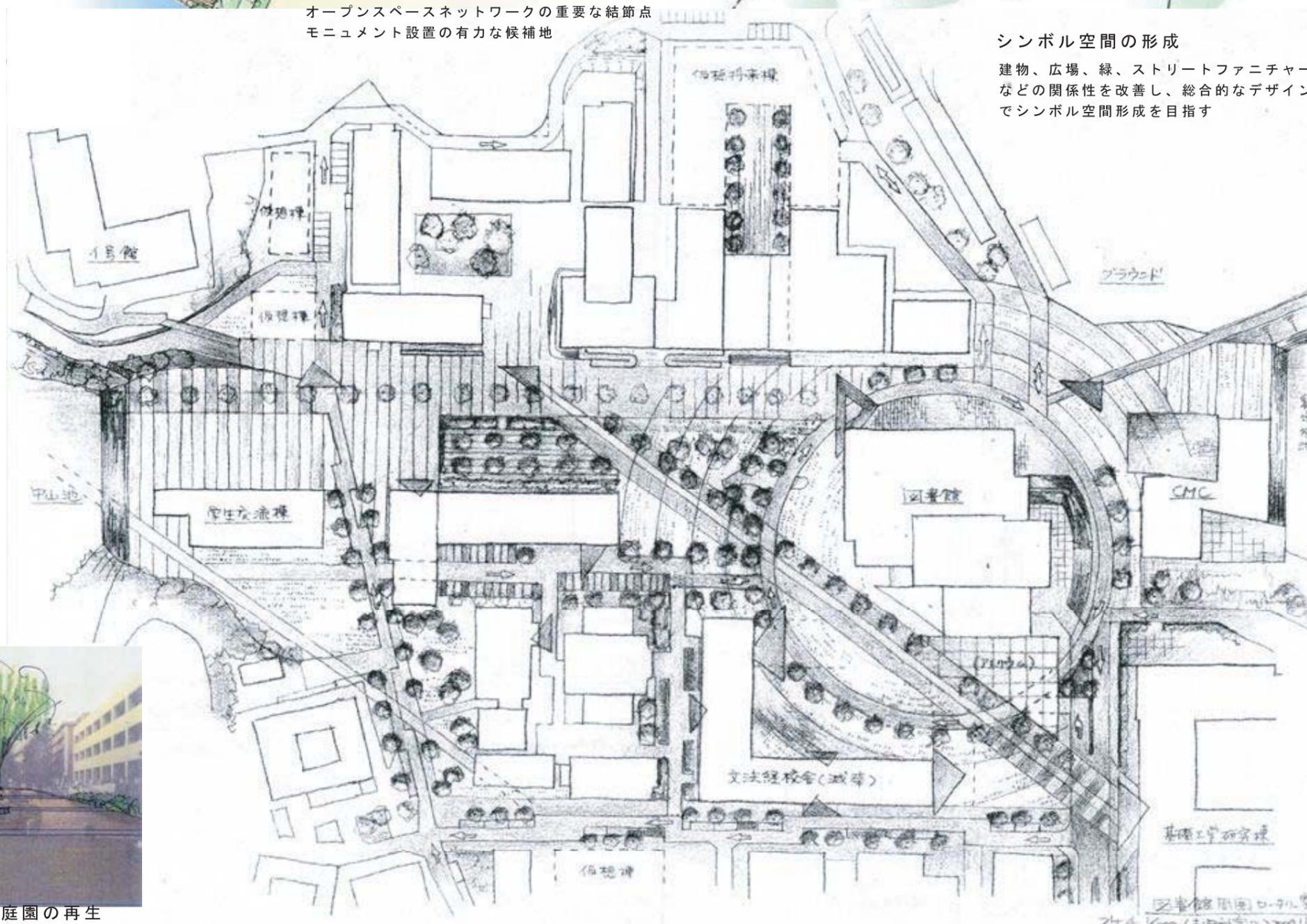
グランドコーナー部分の整備

オープンスペースネットワークの重要な結節点
モニュメント設置の有力な候補地



シンボル空間の形成

建物、広場、緑、ストリートファニチャーなどの関係性を改善し、総合的なデザインでシンボル空間形成を目指す



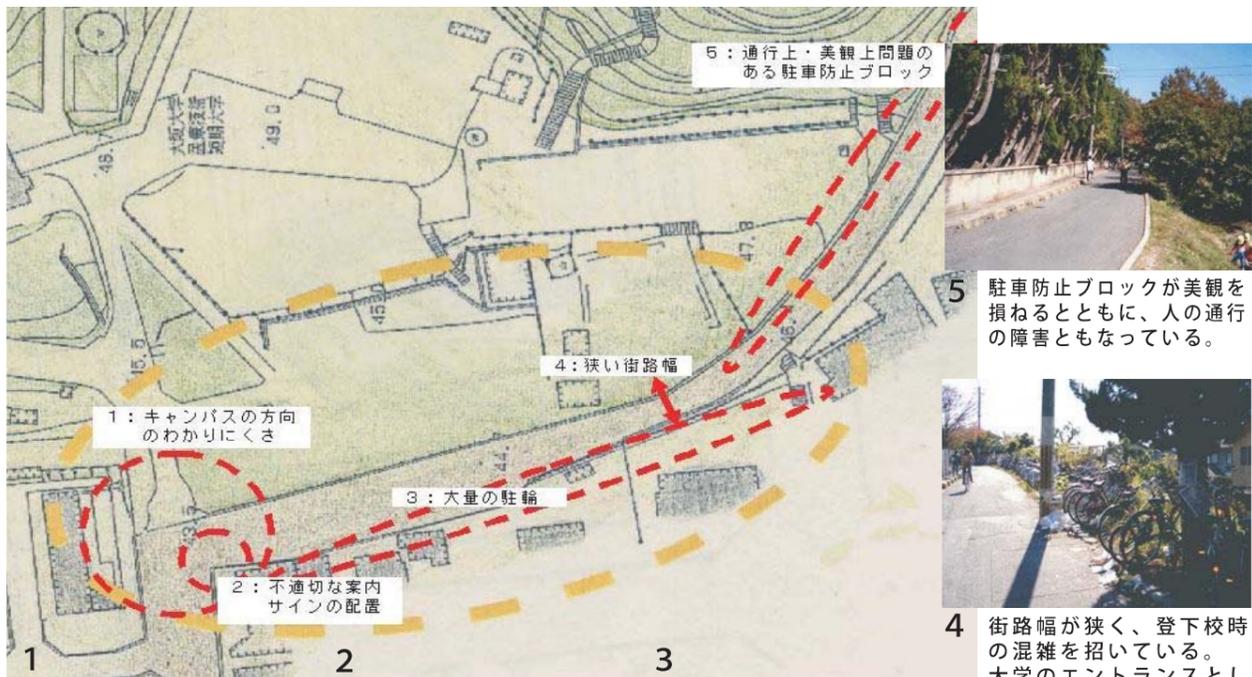
浪高庭園の再生



現状の課題

旧医短正門周辺には、曲がり角を受け止める要素が無く、キャンパス方向への自然な誘導ができていない。また、平日には、街路沿いに150台もの自転車が駐輪される。大学の顔として相応しくない、乱雑な印象を与えている。

さらに、阪大坂導入部は街路幅が狭く、登下校時の混乱を招くだけでなく、大学のエントランスとして貧弱な印象を与えている。街路では、駐車場防止ブロックが美観を損ねるとともに、人の通行の障害ともなっている。



1 曲がり角に視線を受け止める要素が無く、キャンパスの方向への自然な誘導ができていない。



2 案内サインが、曲がり角の陰に隠れているため、来訪者の目に付きにくい配置となっている。



3 平日には、街路沿いに150台もの自転車が駐輪される。大学の顔として相応しくない、乱雑な印象を与えている。



4 街路幅が狭く、登下校時の混雑を招いている。大学のエントランスとして、貧弱な印象を与えている。



5 駐車防止ブロックが美観を損ねるとともに、人の通行の障害ともなっている。



エントランス広場から駐輪場方面を見る（ルーバーで駐輪場を隠す）



エントランス広場の整備と阪大坂の修景

計画の方針

1. 里山環境と歴史分科文化遺産を持つ待兼山の雰囲気やポテンシャルを最大限に活かし、大阪大学の玄関口に相応しい、美しさを親しみを持ったデザインに修景する。
2. 旧医短正門周辺
ソメイヨシノの並木によって、待兼山のシルエットをシンボライズし、猥雑なアイレベルの景観調整を行う。駐輪場の存在を意識させず、わかりやすく際だった大学の顔を形成する。
3. アプローチ街路
車が支配的なしつらえではなく、人々に開放された空間とするため、歩車一体の広がりのある空間を担保した計画とする。リズムカルな舗装パターンとこれに呼応した照明設備の配置により、意識的な距離感を短縮する。
既存の土留壁は石積みの化粧を施し、やさしく自然な雰囲気を高める。



現状の課題

東西通りロータリー付近のエリアは、吹田キャンパスの中央にあり、福利厚生施設、生命科学図書館、留学生センター、事務局棟などの公共性の高い建物に囲まれていることから、キャンパスのシンボルゾーンとなるポテンシャルを有している。

しかしながら、現状は、ロータリー周辺の大規模な駐車場やレーザーエネルギー学研究センターの巨大な壁面、荒れた緑地と法面などにより、殺風景で秩序のない景観となっている。

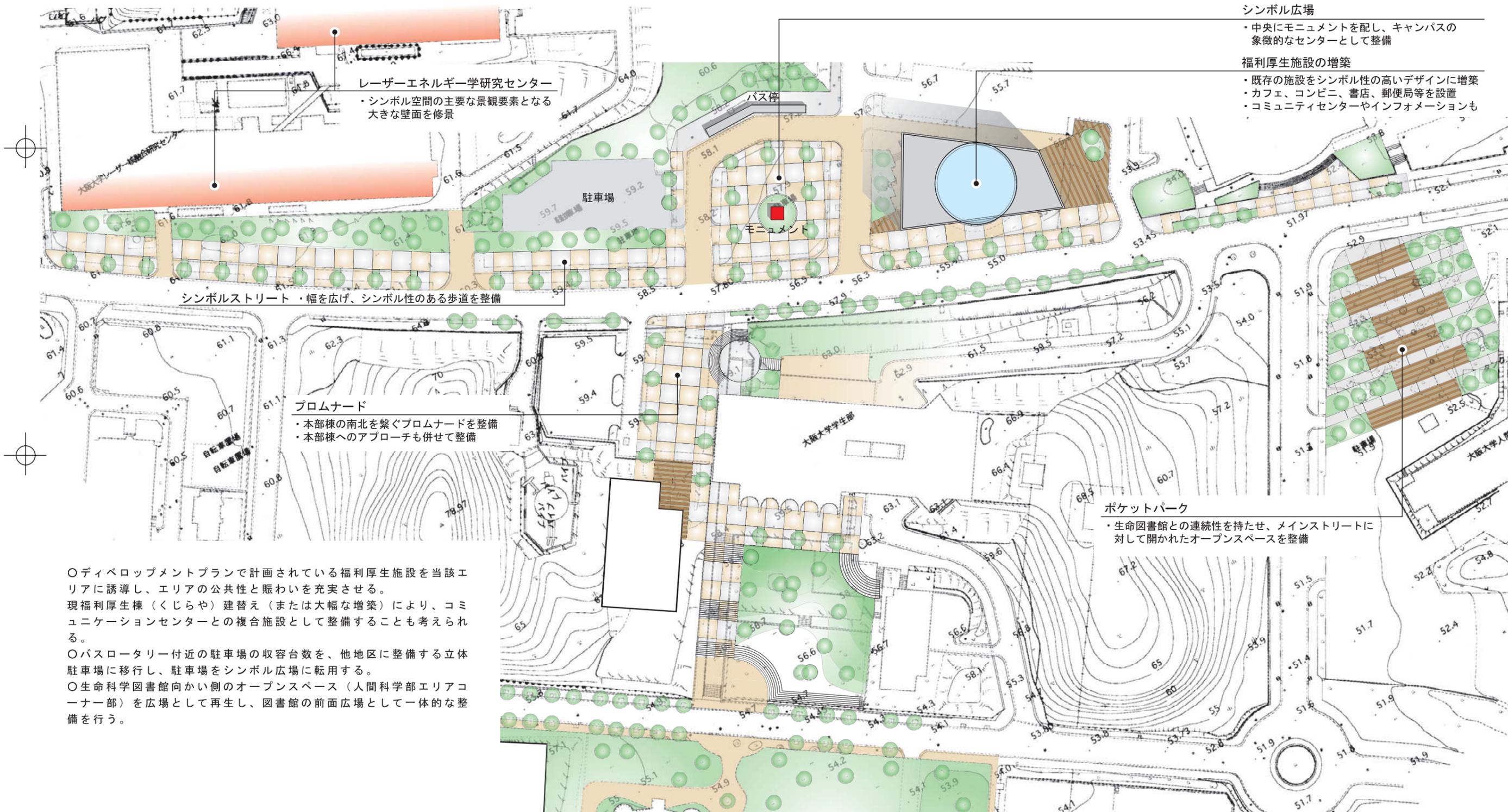
キャンパスの交流の核としての役割も求められるが、広場などの有効なオープンスペースは未整備であり、シンボル空間の形成に向けて早急な対策が必要である。

計画の方針

現在のオープンスペースを再編し、駐車場や緑地を広場や草地・芝生に転用することにより、人々が集うことのできる場所を整備する。

広場は、ロータリー駐車場、生命科学図書館前（人間科学部前）をリニューアルすることにより確保する。また、これらの広場を、小広場やプロムナードで連結し、エリア全体がキャンパスのシンボル空間として一体に機能するよう配慮する。

レーザーエネルギー学研究センターの壁面修景等を行い、シンボル空間に相応しい景観形成を計る。



- シンボル広場**
- ・中央にモニュメントを配し、キャンパスの象徴的なセンターとして整備
- 福利厚生施設の増築**
- ・既存の施設をシンボル性の高いデザインに増築
 - ・カフェ、コンビニ、書店、郵便局等を設置
 - ・コミュニティセンターやインフォメーションも

レーザーエネルギー学研究センター

- ・シンボル空間の主要な景観要素となる大きな壁面を修景

シンボリックストリート ・幅を広げ、シンボル性のある歩道を整備

プロムナード

- ・本部棟の南北を繋ぐプロムナードを整備
- ・本部棟へのアプローチも併せて整備

ポケットパーク

- ・生命図書館との連続性を持たせ、メインストリートに対して開かれたオープンスペースを整備

- ディベロップメントプランで計画されている福利厚生施設を当該エリアに誘導し、エリアの公共性と賑わいを充実させる。現福利厚生棟（くじらや）建替え（または大幅な増築）により、コミュニケーションセンターとの複合施設として整備することも考えられる。
- バスロータリー付近の駐車場の収容台数を、他地区に整備する立体駐車場に移行し、駐車場をシンボル広場に転用する。
- 生命科学図書館向かい側のオープンスペース（人間科学部エリアコーナー部）を広場として再生し、図書館の前面広場として一体的な整備を行う。



現状の課題

吹田キャンパスの門ならびにその周辺は、地域社会に開かれたキャンパスに相応しい景観を呈しているとは言えない。特に千里門は、歩行者や車両の主要な玄関口であるが、調整池、狭隘な歩道、自動車のサービス路のために、殺風景な環境となっている。また、GSEコモン・イースト竣工後は、南側から東側かけたオープンスペースがアーバニティのある広場となることが望まれるが、現状では、東側の鬱蒼とした植栽が存置されたままである。

そこで、以下の整備を実施することにより、千里門からGSEコモン東側に連続するエリアを、誰にも開かれた、親しみのある外部環境に整備する。

計画の方針

1. 誰にも開かれたアプローチ空間

- ① 千里門を広場化することにより、千里北公園と景観の一体化を図る。
- ② 広場、ゆるやかな階段、スロープ、エレベーターなどを組み合わせることにより、誰に対しても気持ちよく移動できる環境とする。
- ③ 既存の植栽を整理し、見通しのよい開放的な空間とする。また、警備員詰所のデザインと位置を改善し、総合案内所としての役割を持たせることにより、わかりやすいエントランスとする。
- ④ 調整池を人工地盤で覆うことにより、来訪者を最初に受け止める広場とする。



A案 南西方向からの鳥瞰写真

2. アプローチ空間における3案の可能性

① A案 大階段タイプ

広くゆったりとした階段による、風格のあるアプローチ空間、階段によるエントランス性の明示



B案 南方向からの鳥瞰写真

② B案 雑壇広場タイプ

地形に沿ったテラス状広場の連続、イベントなど幅の広い利用に対応

③ C案 自然再整備タイプ

既存の植栽の再整備・充実による、やさしいアプローチ空間、開発前の地形の再現



C案 西方向からの眺め

3. アプローチ空間のデザイン（東西に連続する壁）と一体となった門の整備。

4. オープンスペースネットワークの形成

千里門アプローチ空間からGSEコモン東側に連続するエリアの植栽を整理し、人が集まり、憩うことのできる広場とする。

5. 駐輪場・サービスヤードの充実と景観への配慮

GSEコモンサービスヤードと歩行者アプローチ空間を東西に延びる壁面で分ける（アプローチ空間からのサービスヤードへの直接的な見通しを避ける）。

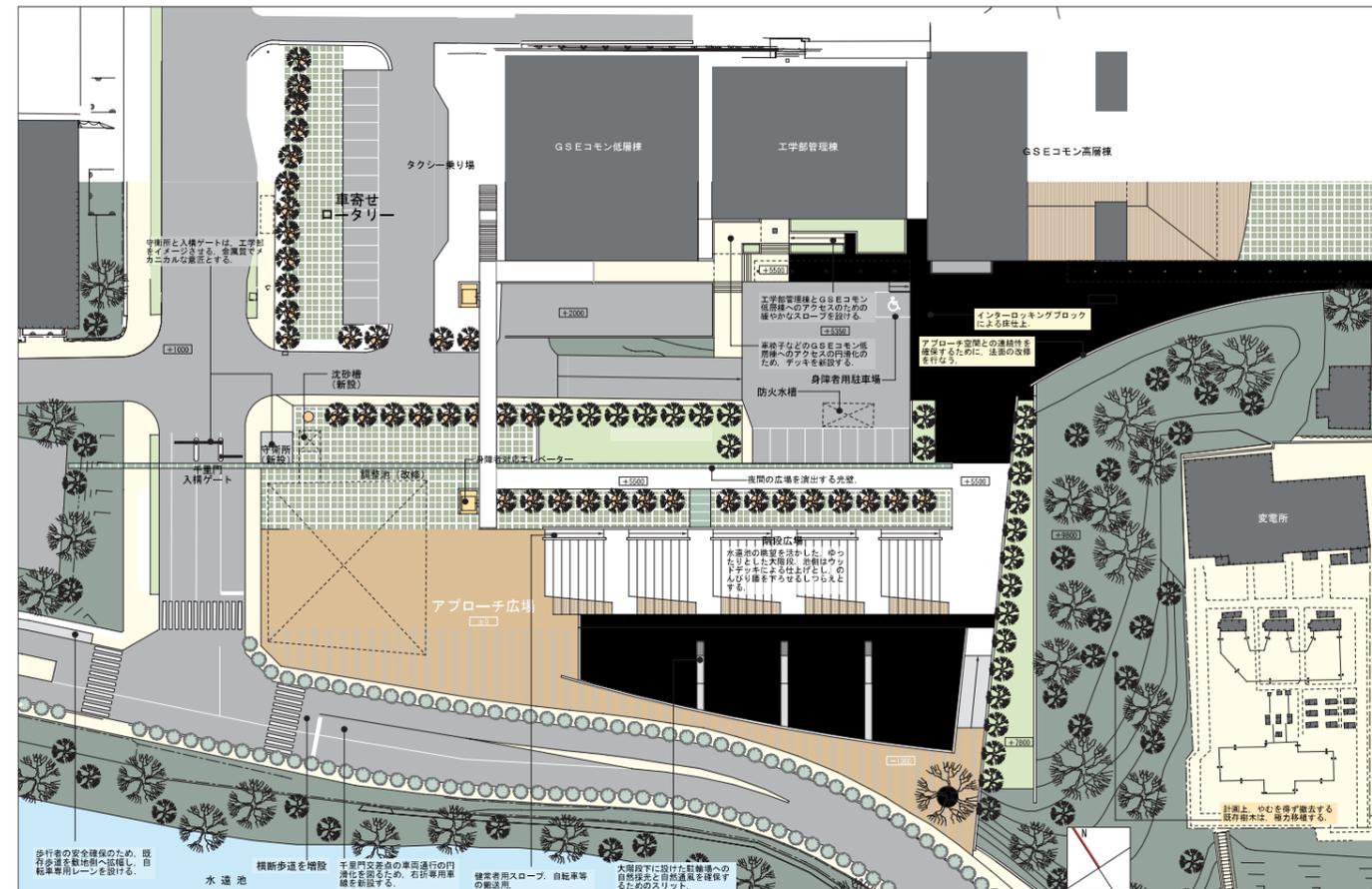
6. ロータリーの整備

将来、GSEフロント用地を自動車用ロータリーに転用し、バス、タクシー、自動車の乗降場所を集約する。車寄せを確保し、自動車来訪者のための表玄関とする。

7. 調整池の排水機能改善



GSEコモン・イースト東側のオープンスペース



A案配置図



B案配置図



現状の課題

樹林池と池のある広場には、大きく成長した樹木や低木・生垣で、視界的にも、空間利用からも見通しが悪く、切断されていて、暗く感じる。同時に憩いや集いのための有効利用できる空間が少なく、水際も低木で仕切られ、親水性も生かされていない。

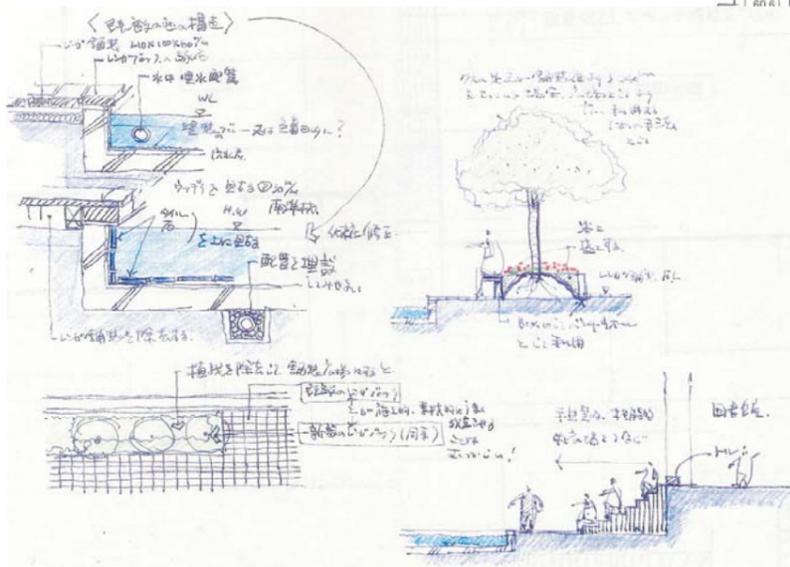
また、動線として中広場と図書館との機能的な軸が接続されていないので、利用者も積極的な参加が生まれない。

計画の方針

- ① 周辺との視界の広がりを確保する。
- ② 参加・交流のできる広場をできる限り広くとる。
- ③ 水際と広場とを一体的空間として連続させ、親水性を高める。
- ④ 退官記念樹は原則として位置を変えないが、やむを得ない場合は移植を考える。
- ⑤ 名板柱は朽ちない素材（石・ステンレス等）で新しくデザインする。
- ⑥ 広場の舗装は新しく、レンガ系ブロック・御影石・ウッディなどで親しみと安らぎのある素材でつくる。
- ⑦ 花ものの植物が少ないので彩りのある植物で補植し、四季感を創出する。
- ⑧ 連続するベンチ機能を多くつくり、サインなどの装置についてもバランス良く設置する。
- ⑨ 噴水設備やレンガ舗装の再利用を重視して考える。ただし、水中に沈下する設備管、ブルーの塗装については美観上良くないので補修・取り替え等を行う。レンガ舗装も傷んでいるので、再利用は慎重に検討する。

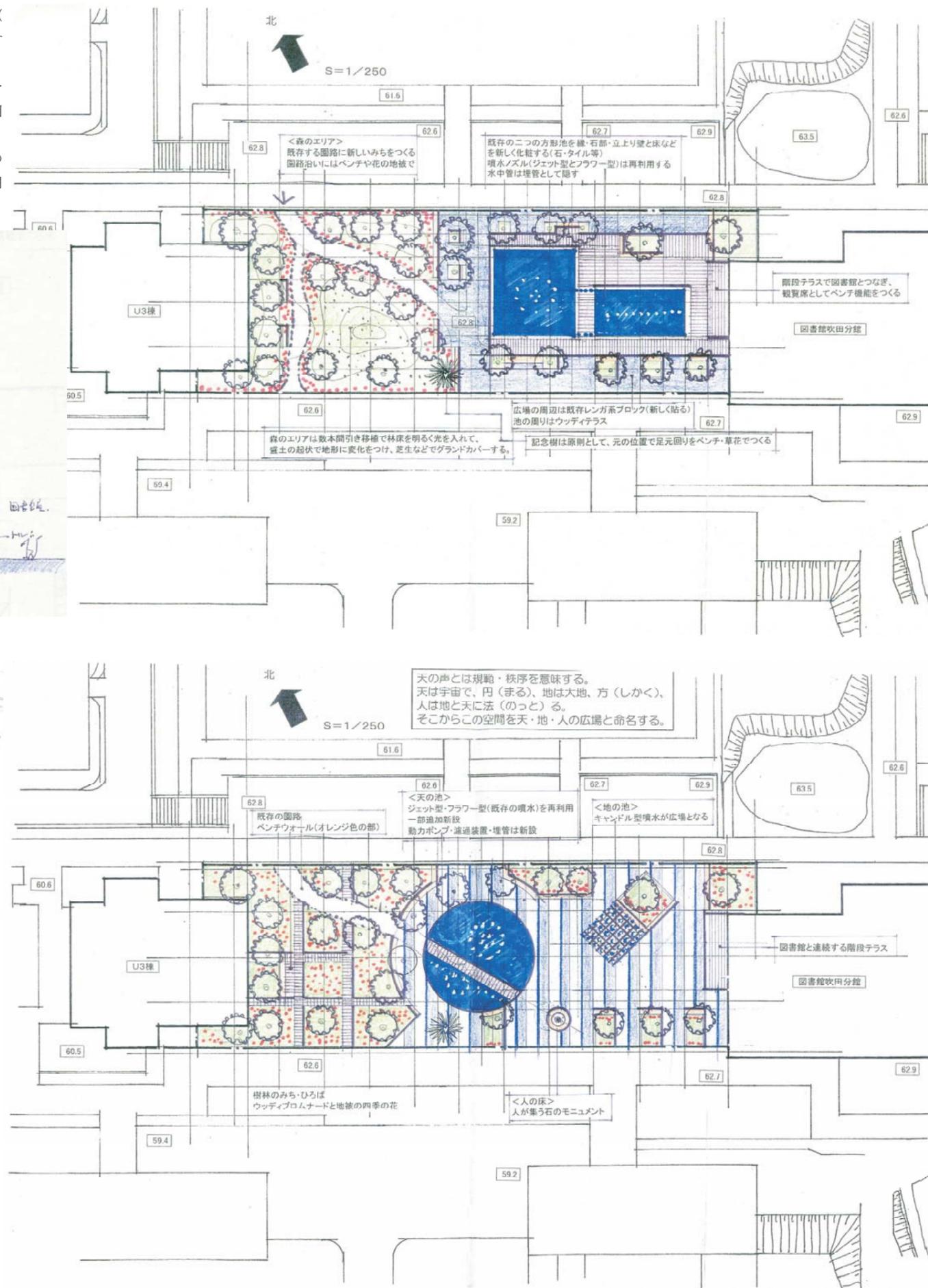
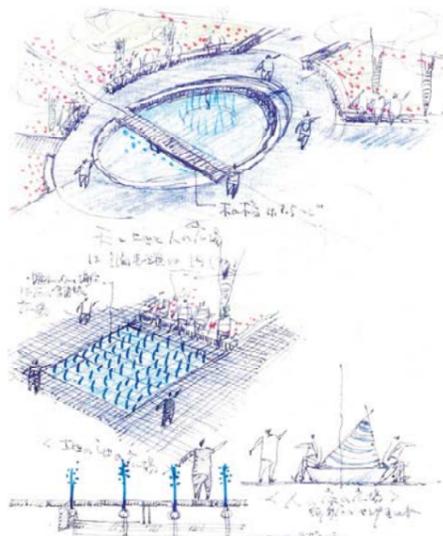
A 案

既設の2つの池の位置と形状を残し、縁（エッジ）と立ち上がり、床の部分化粧する（御影石・タイル等）。記念樹は、現在置を基本としてその回りをベンチウォール（御影石・木製）などで囲み、地被の花でカバーする。森のエリアは、高木が密植して暗いので、間引き、移植、枝打ちなどで松林を明るくして遠路、ベンチなどを設ける。



B 案

既設の池とその周辺部を新しく作り変える案。キャンパスの通路・広場等は、建築形態と同様に方形型で、優しいスラロームや円形などの空間形態・構造がない。ここでは、池の空間を、広場の中心に求心力のある円形で構成して、ウッディのブリッジを架ける。テーマを〈天・地・人〉として、利用できる空間の拡大と開放性の向上を図り、工学部オープンスペースのシンボル空間とする。森のエリアは、ウッディプロムナードで人を導き、地被の花でブロックガーデンをつくる。夜の照明、噴水を照らす水中照明などによる演出も考えられる。



建物（新営・増改築・改修）のデザインガイドライン

●オープンスペースとの連続性

シンボル空間、街路、広場など、キャンパスの骨格や交流軸に面する建物は、これらのオープンスペースに対して連続性・開放性を確保し、交流の機会やアクセシビリティを高める。

- エントランスや主要開口部から建物内の様子や活動がうかがい知れる透明性
- 建物低層部に交流スペース・共通スペース
- アプローチ部の小広場化、植栽の整理
- エントランス性の明示（入り口がわかりやすいデザイン）

●景観の文脈の尊重

スカイラインや壁面線など、キャンパスの景観の文脈や秩序を読みとり尊重する。また、周辺建物群の形態、空間構成、外装材、色彩などについて、基調となっているものを分析し、建物のデザインに活かす（同調または対比）。

●図となる建物

交流施設や福利厚生施設など、公共性の高い建物は、周辺環境との調和を保ちつつ、個性的なデザインになるよう工夫する。外観の一部に、アクセントとなるような形態や外装材を取り入れて、華やかさを持たせてもよい（奇抜とならないよう配慮する）。

●地となる建物

一方、一般の研究棟や講義棟のデザインは、基調となる既存の建物と同調させ、キャンパスの地を形成するよう配慮する。外観には、キャンパスや部局の基調となる形態・外装材・色彩を採用する。ただし、手すり・建具・屋外階段など、小さなデザイン要素にはアクセント色を採用し、適度な華やかさを持たせてもよい。

●リニューアルの成果の表現

主要な建物を改修する際には、ファサードの一部に、新しいデザイン要素（外殻フレーム、バルコニー、庇など）を用い、新しい建築要素による表情豊かで秩序ある外観の計画を検討する。

●共通スペース・交流スペースの充実

建物の新築・改修時には、適切な位置に、学生・教職員の交流スペースや、教育・研究のための共通スペースを確保する。

●長く実効的に使用できる配慮

汚れにくく、維持管理のしやすい材料・構法・デザインを採用する。また、将来の用途変更や、先進的な教育・研究に対応できるよう、講義・演習・研究スペースにフレキシビリティを確保する。

●ユニバーサルデザイン

バリアフリーやわかりやすさに配慮する。建物の改修時には、エレベーターの整備改修、段差解消、廊下幅員の改善、便所の改善などを実施する。

●防犯性への配慮

事務室・居室からの見守り（エントランスや外部空間に視線の届く空間構成）の確保、建物内外への防犯設備の導入など。



スカイライン・壁面線に配慮された秩序ある景観
(慶応大学藤沢キャンパス)



歩行者空間との親密な関係
(立命館大学草津キャンパス)



図となっている建物
(食堂と図書館)
(ユトレヒト大学)



エントランスホールにつくられたカフェ
(ユトレヒト大学)



開かれた表情の実験施設
(ユトレヒト大学)

オープンスペースのデザインガイドライン

●キャンパスの骨格への配慮

シンボル空間、エントランスゾーン、メインストリート、副次的ストリート、広場、緑地などのデザインには、キャンパスの骨格形成のために定義づけられた役割を果たすことが求められる。交流のための広場、シンボルストリートの形成など。

●広場のデザイン

交流の場、シンボルとしての広場など、役割に対応したデザインが求められる。広場自体の形態だけでなく、建物・街路・自然など、周辺環境との関係に配慮する。

- 集える場所、憩える場所：株立ちの植栽、舗装・芝生の整備、座れる場所・ベンチ、
- 景観：見通し、建物・植栽などによる囲まれ方、風景の活かし方
- アイデンティティ：舗装、形態、沿道の建物、モニュメント、ネーミングなどによる個性化

●街路のデザイン

交流の場、自然を楽しむ場、シンボルとしての街路など、役割に対応した総合的なデザインが求められる。

- 交流：建物と街路の親密な関係（視線の透過性、アクセシビリティなど）、オープンスペースのネットワークに対応した街路と広場との連続性
- 自然：視点場、法面・擁壁、街路樹などの整備
- 交通の役割に対応したデザイン：歩車分離/融合に対応したデザイン、歩車道比率、車速を抑えるデザイン
- 景観：D/H・スカイライン・壁面線への配慮、建物のデザインガイドラインと連動
- アイデンティティ：舗装、デザイン、建物、植栽、街路樹などによる個性化

●維持・管理に配慮した植栽の計画

適切な配置・樹種・剪定方法・ボリュームの組み合わせによる計画

●ユニバーサルデザイン

段差解消、屋外へのエレベーター設置、建物内エレベーターの利用など

●ストリートファニチャー

サイン、ベンチ、照明、自転車置き場、ゴミ箱、ゴミ置場、バス停屋根、渡り廊下屋根などについて、優れたデザインの導入と統一。

●駐輪場の計画

駐輪場は建物一棟または数棟単位で、所要台数を確保することが望ましい（分散配置）。



建物に囲まれたモール
(京大桂キャンパス)



“間”を大切にしたい
アプローチ空間とプラザ
(慶応大学藤沢キャンパス)



内と外のつながりを重視した建物のデザイン
(慶応大学藤沢キャンパス)



駐輪場に対して配慮のない計画



“間”の少ないアプローチ空間（留まるための場所がない）



障害物のある歩行空間



閉じた表情の共通施設



公共性の高い建物でありながら貧弱でバリアのある歩行空間

現状の問題



1. 圧迫感を与えない建物ボリュームの考え方

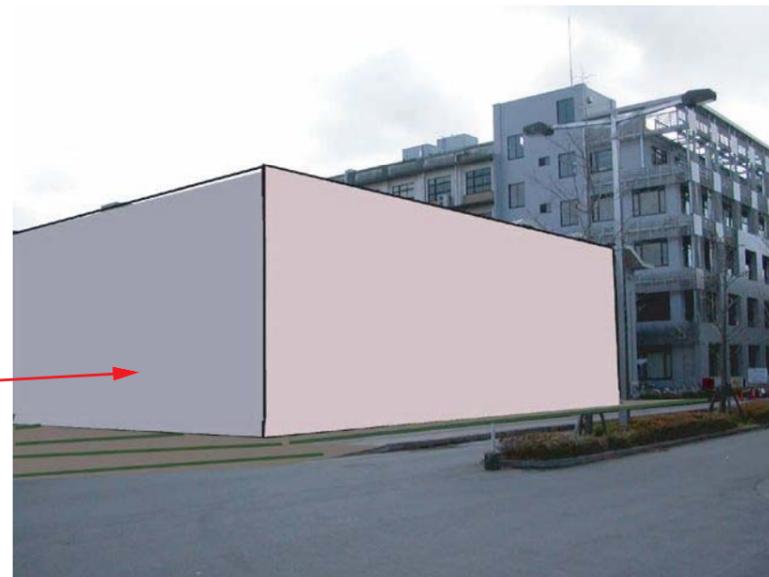
キャンパス内は、高密度な利用・機能的な利用が必要とされる場所と、歩行者や屋外でつろぐ人々の快適性が優先される場所と、2通りを考えることができる。主たる歩行者動線や広場は、建物によって圧迫感や暗さがもたらされないように、配慮してゆく必要がある。



工作センター付近を大通りから見たところ：重要な歩行者動線にあたるこの場所では、将来計画での建て替えに伴う圧迫感が懸念される。



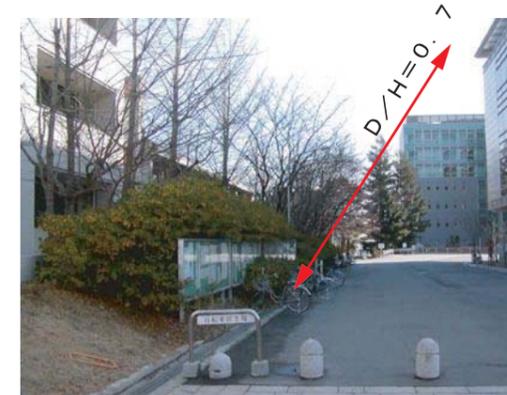
主要な歩行者街路として
図書館前に準じて18m程度
確保し、壁面線を決定する。



日影検討によって求めた景観上許容される建て替え可能ボリューム：
街路を18mの歩行者専用道路と考えたときに、約半分が冬至でも4時間日照を確保できることを求めると、このブロックでは分節された2層程度の建物が上限であると考えることが出来る。

<日影検討から求めた結論> (次項参照)

- (1) 重要な歩行者街路にあたるブロックでは、建物が圧迫感や暗さを与えない程度のボリュームとしなければならない。
具体的には $D/H=0.7$ 以上とすること、および街路の半分で冬至に4時間日照(測定面=GL+4m)を確保することを提案する。
- (2) 上記に則して壁面線を決定し、将来にわたってこれを守ることが必要である。
- (3) 街区ごとに統一感、リズム感を生むように計画することが必要である。



図書館前：主要な歩行者街路に大きく影を落とし、かつ圧迫感も大きい。
この場所の D/H は、道路敷までで0.7弱である。
最低限、舗装をソフト感のあるものに変えてゆくなど可能な限り歩行者の快適性を高める工夫が必要。



高密度の利用が必要である場合も当然あるが、
主たる歩行者動線はこのように高密度であっては
ならない。



高密度に建て迫った街路。路上駐車も大変多く、
陰鬱な感じが強い。



街路の南側に7層の建物のがあるので、日影が大。
今後この街路に面して計画される建物は、複合日影を考慮して、十分な棟間間隔をとって計画し、
街路がこれ以上暗くならないよう配慮する必要がある。

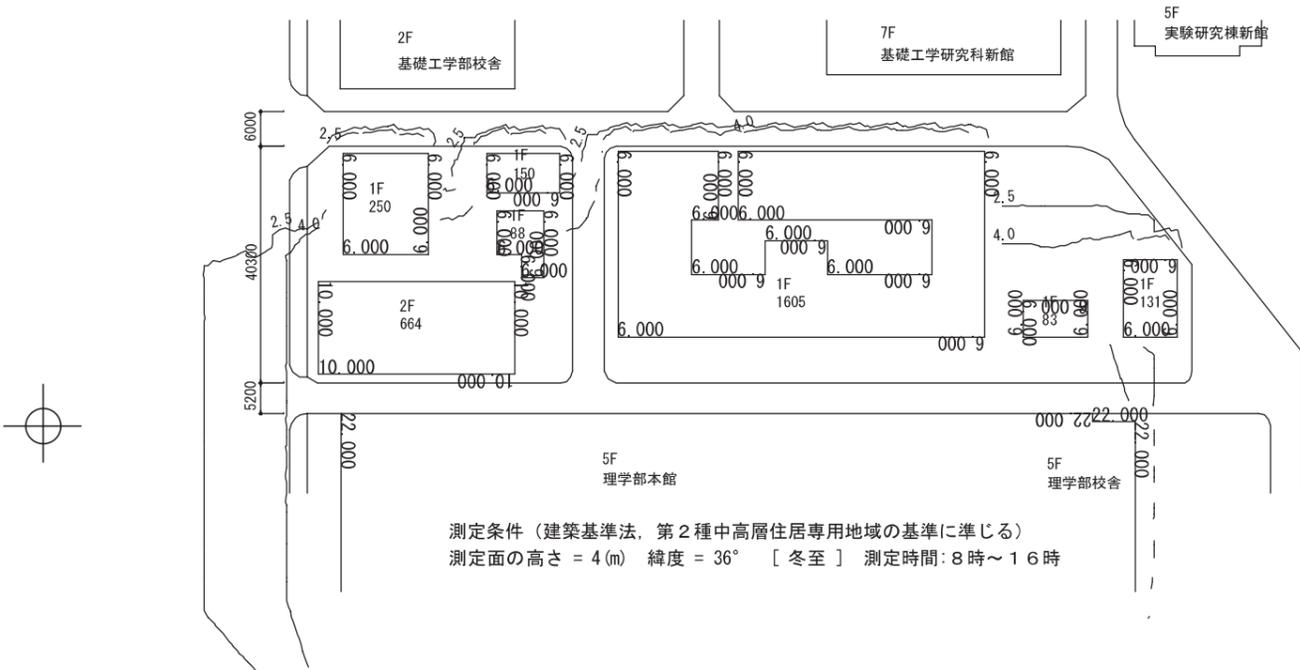




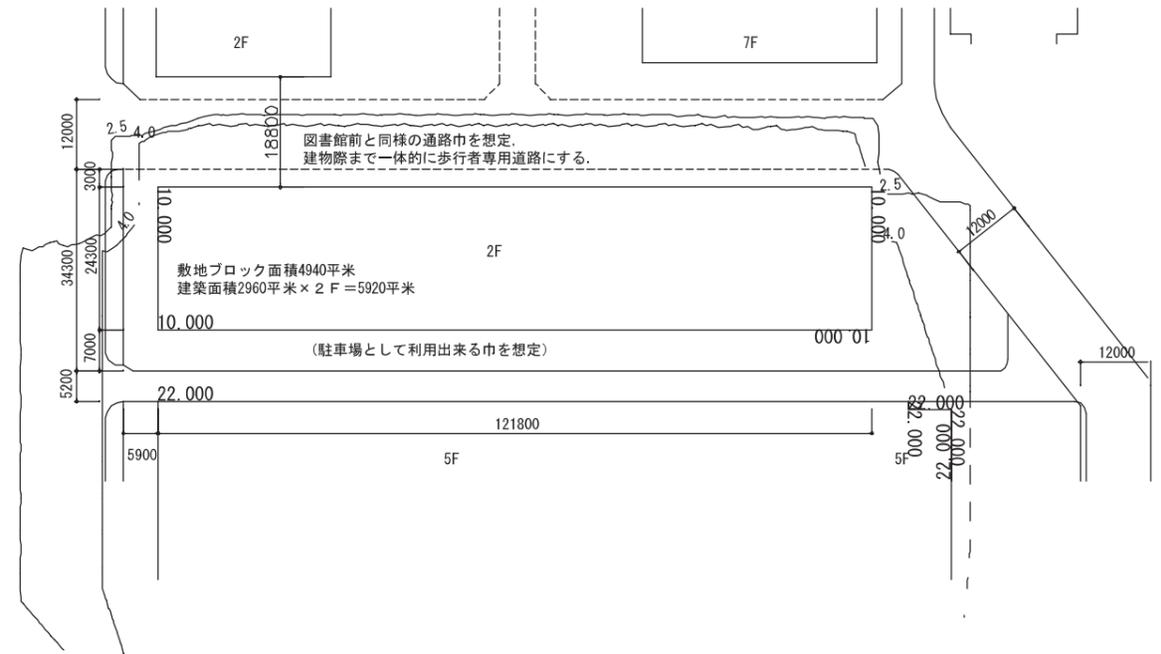
工作センター周辺における日影によるボリューム検討 (1/1200)



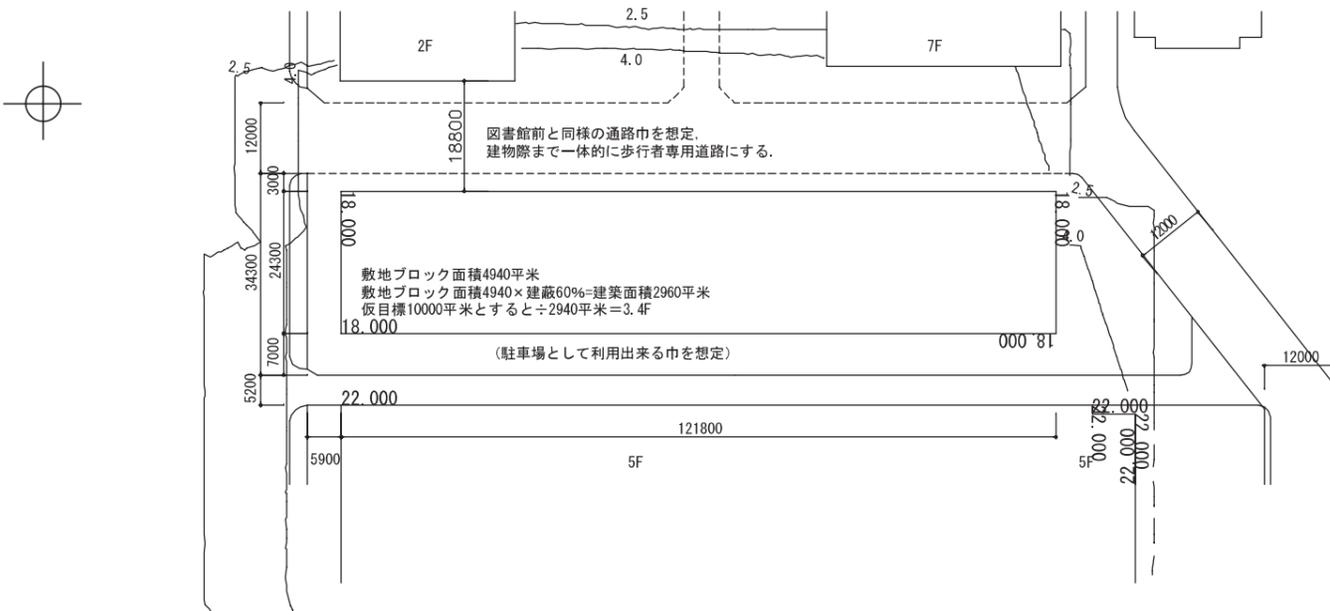
a. 現況 (計2970㎡) : 低層なので明るい。街路の中央で、4時間日影。これを目標の明るさと考える。



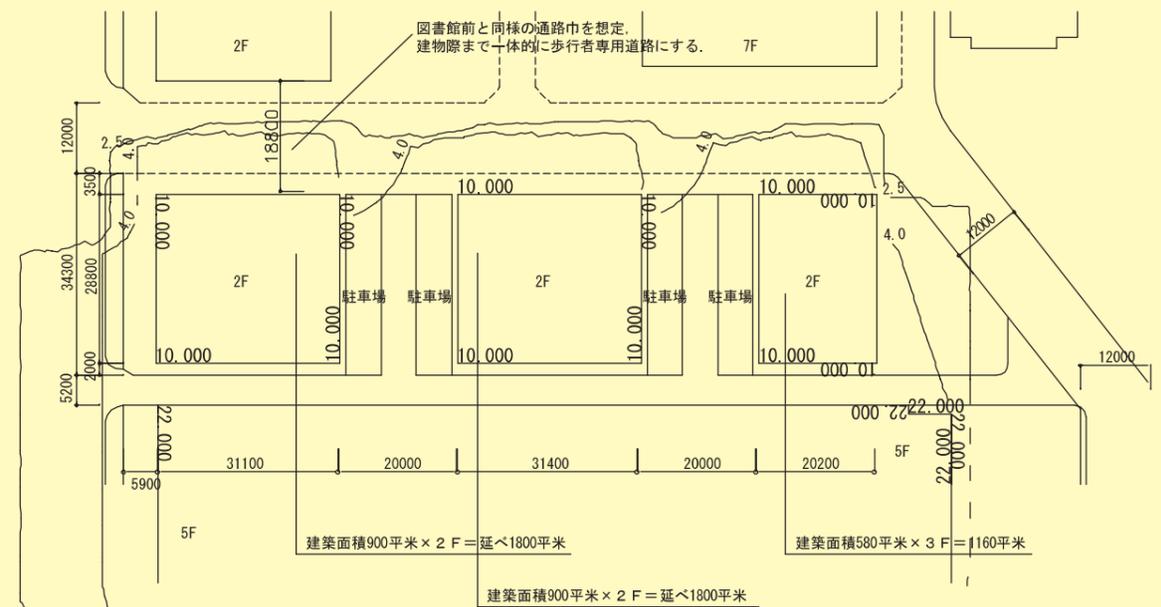
c. 低層 (2階建て) を一体で建てた場合 (5920平米) : 低層であっても、現況より暗くなる。



b. 10000平米を中層 (4F) で建てた場合 : 仮に4層で建築すると、街路全体が4時間日影を大きくオーバー。



d. 低層 (2階建て) を3分棟で建てた場合 (合計: 4760平米) : 低層を分棟化することで、現状と同等の明るさを得られる
それでも現況工作センター周辺の1.6倍の床面積を確保できる



<結論>

- (1) 重要な歩行者街路にあたるブロックでは、建物が圧迫感や暗さを与えない程度のボリュームとしなければならない。具体的には $D/H=0.7$ 以上とすること、および街路の半分で冬至に4時間日照 (測定面=GL+4m) を確保することを提案する。
- (2) 上記に則して壁面線を決定し、将来にわたってこれを守ることが必要である。
- (3) 街区ごとに統一感、リズム感を生むように計画することが必要である。



2. 街路に応じた歩車道の考え方



共通教育棟群前：
レンガや石などの美しいペイブメント（舗装）は、歩行者専用空間であることを強くアピールする。



学生会館前：
人の賑わいがある場所だが、重要な車動線にもあたるため、歩車分離を徹底する必要がある。



写真の、下草が刈られた状態では美しい。主たる歩行者動線としては狭いので、拡幅整備が必要。



手摺りを撤去して、構台状の部分を広げる。また正面の立体駐車場計画では景観に配慮。合わせて歩行者専用通路の拡幅をはかる（放射線シールドの撤去も含めて検討する）



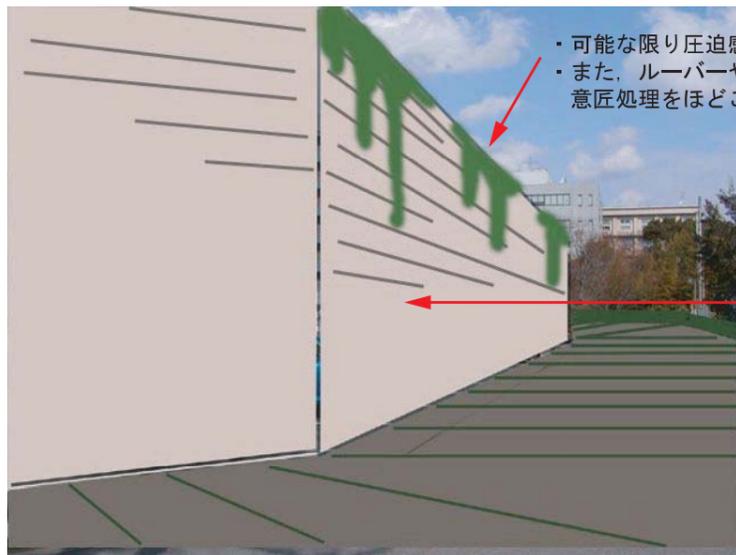
必ずしも樹木伐採は必要でないが、可能な限り広がり、見通しの良い通路を計画する必要がある。



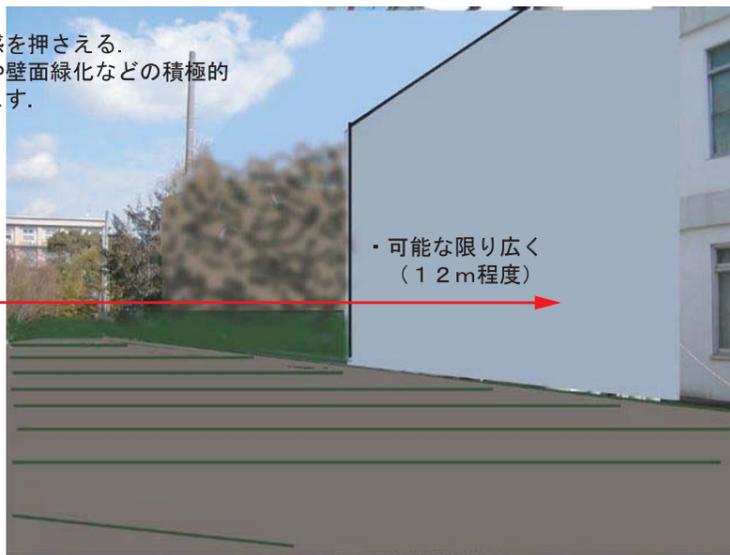
理学部裏立体駐車場計画地：



・歩行者街路としてのボトルネック部分なので、放射線シールドの撤去をはかる。



・可能な限り圧迫感を押さえる。
・また、ルーバーや壁面緑化などの積極的意匠処理をほどこす。



・可能な限り広く（12m程度）

主たる歩行者動線になるので、建物（立駐）の圧迫感を可能な限り軽減し、緑化やルーバーなどの積極的意匠処理を行う必要がある。また、道路は歩行者専用をアピールする舗装や植栽をもうけながら、可能な限り拡幅して、十分な幅員を確保する必要がある。



豊中キャンパスには、アイストップとなる景観要素が少ない。今後そのような場所に建設される建物は十分にこれを考慮する必要がある。



裏道的な場所であっても、アイストップは景観上十分に有効である。



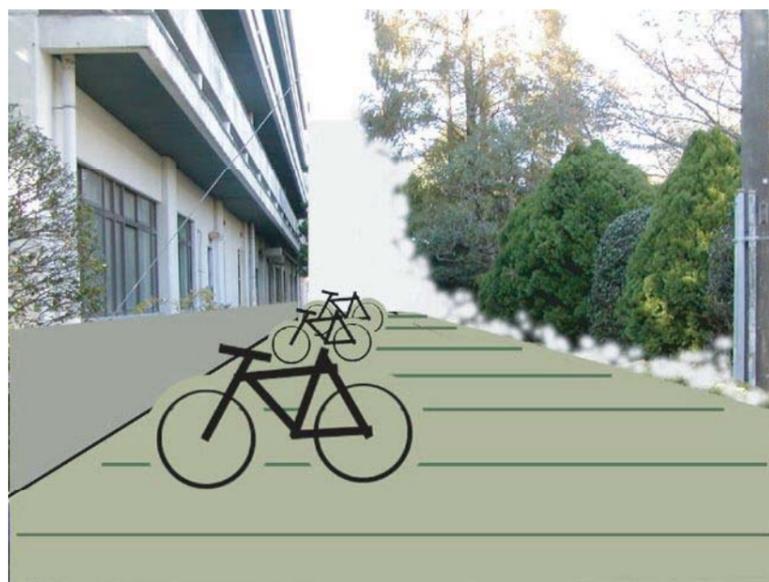
工作センターと基礎工の間の街路からは、待兼池周辺がアイストップとして目に入る。



3. 駐輪場の分散配置について



共通教育大通り脇、言語文化研究棟裏：
植栽が密にほどこされているが有効でなく、閉鎖的空間である。



現状の植栽をある程度残しながら、中低木を中心に整理撤去して見通しを確保しつつ、建物と街路の間の空間を駐輪場にしてゆくことが可能である。



同じ場所を共通教育大通りから見たところ。



共通教育化学棟前も、植栽と掲示板の背面は同様。



共通教育化学棟前。



キャンパス内のどこでも、駐輪はあふれている。

4. 植栽の街路との関係性について



大通り旧サイバー前：
植栽が過剰に重層的で、街路と建物敷が分断されている感がある。



現状の植栽をある程度残しながら、中低木を中心に整理撤去して見通しを確保し、芝やタマリユなどの地被類や草本植物を多く取り入れる。また、道路と建物敷の段差が大きくない場所では、石積みや小擁壁類を極力廃止して、街路との親和性、一体性を高める。



現状の大通り・共通教育前では、通りの中央に並木が入っており、ビスタの焦点を阻害している。中央の並木を撤去し、街路両サイドの並木を主体とすることで、見通しが大変良くなる。



歩道の高木、低木、建物足下の中低木と、3層以上の重層的な植栽で、閉塞的な感じがする。



同様のことは、オープンスペースにも言える。現状の植栽は街路に対して閉鎖的で、重く暗い。

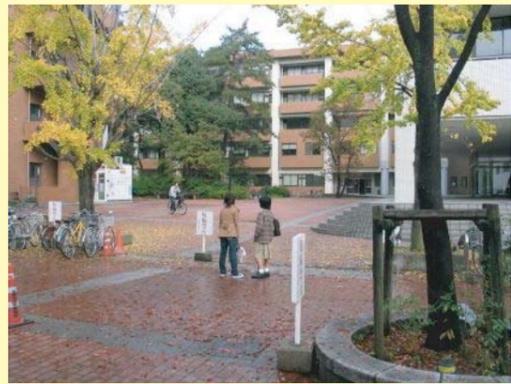


すっきりした建物際の例。





5. 中庭 (将来の新規・改修) の計画指針の考え方



この共通教育棟群中庭は、人の通行も多く、樹木の密度も適度で、舗装も街路と一体性を持っており、比較的良く整備され、利用されている。

6. 建物入口と街路の関係性の考え方



通り抜けによって、人を呼び込む設え。



共通教育棟ピロティ：街路からの引き込みを工夫している例。天井高さが低く薄暗いのが惜しい。



共通教育棟中庭：共通教育棟群の中心にありながら、通過動線に面していないため、使われないもったいない空間である。場合によっては自転車置き場等としての利用も考えられる。



宇宙・地球科学科棟中庭
非常に閉鎖的な空間。
右の化学・高分子棟入口と2層分程度のピロティでつないでおけば、見通しとともに、人の往来が生まれるので、改修の機会があれば検討の価値はある。

表裏の関係にある。



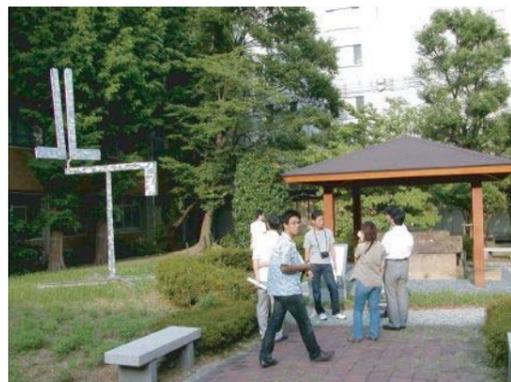
理学部中庭。外界と断絶しており変電設備等のみが設置された荒地地になっている。設備置き場のな中庭が生じることは、致し方がない面もあるが、砂利敷きなど最低限の舗装は必要と思われる。



入口が街路から引き込み過ぎて、内向きな空間を構成している例。
庇の形状や舗装の工夫などによって、街路に対して正面性をアピールする設えが必要である。



大通りに背を向けた位置に入口があり、孤立感のあるオープンスペースになっている。改修の機会があれば、中庭とのピロティによる連絡を検討する価値があると思われる。



文法経校舎中庭：比較的きれいに整備されているが、モニュメント、東屋、プレハブ、渡り廊下がちぐはぐである。休憩スペースとして設置される中庭は、プレハブ等を撤去して、極力広がり感のあるものにしなければならない。



街路から遮断されるように計画され、街路との親和性・一体性を欠いている。
植栽の一部撤去と、歩行者仕様の舗装を車道へ伸ばす工夫だけでも人を呼び込むことができる。



1. 街路：歩行者系



底のある直線的な歩行者通路

せっかく池と緑のある中庭に沿っているのに、生垣によってオープンスペースとの関係性を絶たれ、「眺める庭」になっている。一体的な舗装を施し植栽の配置を変更することで、オープンスペースと一体となった、アメニティのある遊歩道となる。



緑と遊歩道が一体化した魅力的な空間



通路と植栽の間に明確な境界がなく、緑をより身近に感じることができる



幅の広い植栽帯を活かせていない、直線的な歩道



通路と植栽が、生垣と側溝によって分断されている



キャンパス中心部から離れたのどかな印象の歩道。舗装を変え、植栽のメンテナンスを行うだけで、より魅力が向上する。



遊歩道として整備されているが、植栽のメンテナンスが行われていない



広いオープンスペースに面しているのに、全く関係性をもたないコンクリート舗装の歩行者通路



食堂のオープンテラスと豊かな緑があり、賑わいとアメニティのポテンシャルが高いにも関わらず、アスファルト舗装と緑石、更に駐輪が魅力を損ねている



キャンパス中央からの工学部へのアプローチ、ちょうどゲートになる部分であるが、駐車場の中を通過して、裏道を上がっていくような印象である。



場所によってはほとんど手つかずで荒れた通路もある

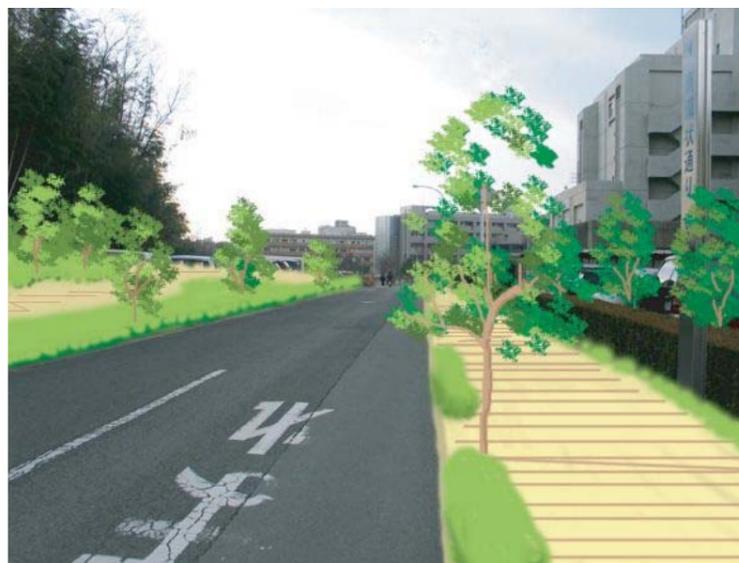
2. 街路：自動車幹線系



歯学部系横の車道

メインストリートから入ってすぐの自動車道であるが、両側が駐車場になっていて並木もない。道路標示もはげている。

駐車場との緩やかな緩衝帯として、並木は不可欠な要素。魅力的な遊歩道を組み合わせて、人が快適に歩ける道にする必要がある



植栽や建物とのバランスがよく取れている並木道



開放性の高い並木と広場が道路と建物の関係を良好に保つ



2列の並木の密度が高すぎて、鬱蒼とした印象を与える。交差点の舗装色が景観を損ねている



密に植わった緑が壁となり、道路と周辺の関係性が絶たれている



4車線並の大通りであるが、全体に閑散とした印象である。周辺建物との関係性を考慮した植栽配置を行い、アイキャッチや中央植栽帯などのアクセントを設ける必要がある。



正門としてのシンボル性が求められるアプローチ部分は常に質の高いメンテナンスが施されている。



シンボル性の高い建物がアイキャッチとなり、左側の豊かな緑はよく整備されている。また歩道の舗装も質の高いものを使っている。それだけに、右側の駐車場部分が未整備な印象が強調され、バランスを欠いている。



一体的に整備された並木と正面の大木のアイキャッチがシンメトリーを強く感じさせる、非常に並木道らしい道路となっている。

3. 広場



人科系建物前のオープンスペース

正門からのアプローチがメインストリートと交わるコーナーに位置し、反対側には生命科学図書館のシンボル性の高い建物が建つ高ポテンシャルなオープンスペースであるにもかかわらず、周囲は生垣によって完全に閉ざされている。またオープンスペース自体も整備が十分でなく、魅力に乏しい空地となっている。

キャンパスイメージを印象づける重要なオープンスペースと位置づけ、メインストリートに開かれた、並木など一体的な整備をはかる。またスペース内にモニュメントやアメニティ施設などを整備し、キャンパスの潤いを創出する。



医学部のシンボル広場であるホスピタル・パーク



医学部の威厳を示す、前庭としての芝生。広場というよりは見せるための庭として機能している。



キャンパス全体の中心、イメージの核、賑わいの核となるべき場所が駐車場として利用されている。



図書館と回廊に囲われた中庭だが、それらとの関係性は薄く、魅力に乏しい



ただでさえ暗くなりがちピロティの広場が、掲示板に囲われより暗く、閉鎖的な印象になっている。



入り組んだ工学部の建物配置から生まれる中庭。植栽や舗装を工夫することで、変化に富んだ魅力的な広場とすることができる。



せつかくの彫刻や階段状の敷地形状が活かされていない。広場に面した飲食施設は生垣によって関係を絶たれている。また歩道との関係性も薄い。



工学部系の中では最も賑わいのある広場であるが、舗装・植栽配置・ストリートファニチャーといった広場を形成する各要素に一体的な調和が感じられず、キャンパスの主要な広場としては、魅力に乏しい。

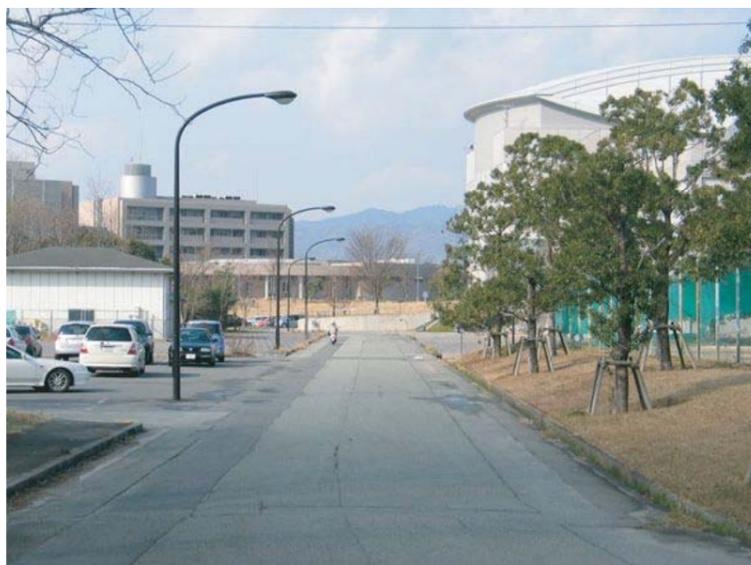


新築されたGSE棟の大階段・デッキスペースの前が、臨時とはいえ駐輪場となっている。GSE棟のオープンスペースのコンセプトが全く活かされていない。



広い空地を用意しただけでは広場にはならない。

4. アイスストップとしての施設配置



キャンパス南東部の施設開発用地

この場所に計画される施設には、アプローチからのアイスストップとしての役割と周辺一帯の景観を統合する求心的なデザインが求められる

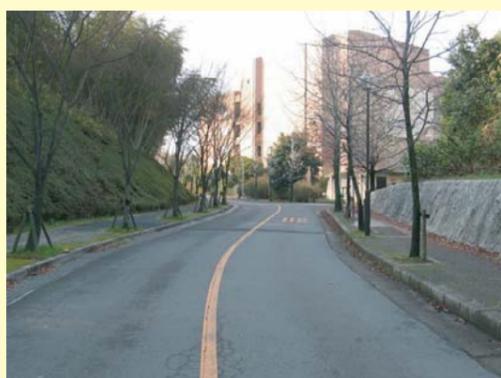
5. 建物の構え：工学部系の引き込むアプローチ



生命科学図書館が正門からのアプローチを受け止めるアイスストップとなっている



シンメトリー性の強い並木道を、歯学部 of 建物が真正面から受けている。



上りのアプローチの正面という、アイスストップとして格好の位置に建つレーザー研の施設であるが、巨大な壁面が聳える魅力の乏しいものとなっている。



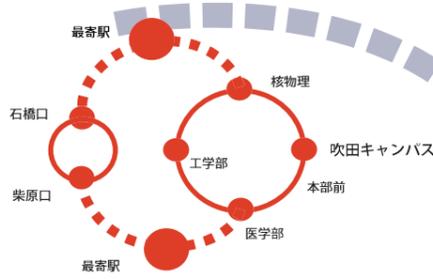
アプローチに対して正対してなくても、建物の形状やデザインによってはアイスストップとなりうる。

コミュニティバス



現在キャンパスの空地の至る所が駐車場と化している状況は誰も好ましいと認識しているわけではない。コミュニティバスはキャンパス内と最寄り駅を循環するもので、パークアンドライド方式などの入構規制の導入とともに検討の時期にきている。

豊中キャンパス



大学が主として行うアクションプラン

従来からの施設マネジメントであるが、その場限りの対策を行うのではなく、中長期を見据えた先見性のある施策と統合的かつ柔軟な運営が求められる。

サポート型（参加・提案型）アクションプラン

学生や教職員などの活動による、大学組織が直接的に関わらない学内N G的なマネジメントの形態。大学としてこれらを支援していくことで、費用対効果の高い維持管理機能を期待できるとともに、大学運営への参加意識と大学に対する誇り・愛着を高める効果や、学内・地域コミュニティの醸成効果を期待することができる。また学生、教職員の参加によるデザイン検討や自発的なマネジメント提案があればそれを支援したり支援するなど、継続的に意見を汲み上げてゆくしくみが求められる。

レンタサイクル制度



キャンパス内の自転車の数は豊中において既に歩行者空間を埋め尽くすまでに至っている。本来、通勤の足としてキャンパス内の移動手段として、最適な乗り物であるはずのものが、その量の多さと駐輪スペースの少なさから問題となっている。レンタサイクル制度の導入によって必要な場所に必要だけの自転車を利用できるようにその循環のシステムを考えて配置し、キャンパス内における自転車の総量を規制する。

ユーザー参加型点検評価



学生や教員が普段利用する研究棟内を定期的に点検するキャンパスパトロールや点検評価チェックシート、利用者アンケートによるデータを公開することで定期的に改善提案を汲み上げ、リニューアルにつなげてゆくことが重要である。



地域、社会、産業と連携していくためのアクションプラン

サテライトキャンパス、インターンシップ、ベンチャーイノベーションを展開しながら地域への様々な働きかけや施設開放 地域からの提案やキャンパス計画への参画などの相互交流をはかりながら取り組んでゆくべき課題である。行政の協働や、都市計画においてキャンパスの役割を位置づけることも考えられる。

回遊散策路の構築と開放

施設の開放と防犯安全対策は矛盾しやすい条件である。学内の危険な場所に適切な対策を講じるとともに、日常の点検評価が重要である。コミュニティや人の目の存在もまた、物理的対策と両輪をなすものである。



アート・インスタレーションイベント

オープンキャンパスや大学祭に合わせて実施し、キャンパスを地域に開放する。また地域の芸術家の協力を求めるとともに、先ではビエンナーレ形式で優秀な若手芸術家を表彰する場を提供する。



大学のシンボルの形成

アンケートによれば現在のキャンパスには阪大をイメージできるような施設や場所が乏しく、シンボルになるものを望む声も多く見られる。それには単に施設を建設するのではなく、適塾や懐徳堂、湯川記念室など阪大にゆかりのある資源を如何に活用するかが重要である。とりわけ大学の歴史や伝統的資源を集約し、広報していくことが望まれる。



キャンパスマップ整備

生態系マップ、アートマップ、ハザードマップ等の整備や絵葉書の作成、販売等を通して大学の現状を把握し、広報に繋げる。



待兼里山学校／千里竹林学校

キャンパスの自然豊かな特性を生かし、動植物や農林業に詳しい地域住民や学生、教職員らのボランティアを募り、キャンパス内を広く市民学習の場として開放し、イベント等を支援する。



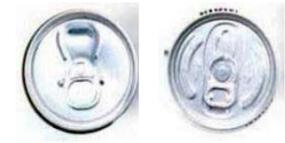
コミュニティガーデン

リザーブ用地や荒れている既存の植栽部分などを学内外の有志にレンタル・アドプトすることで美しい庭園を再生させる。



リサイクルクラブ

大学生協や環境資源委員会の支援
1 014000sの導入、フリーマーケット
バザー等のイベント支援



学内生態系保全醸成プログラム

火を使って良いルール、木を切って良いルール、剪定のルール策定、植栽計画コード、里山形成プログラム、虫育成の可能性検討などが考えられる。



キャンパスレンジャー

大学キャンパスはアンケートでも指摘されているように、維持管理が適切に行われているとはいえない状況である。これは単に環境美化に要する経費の問題だけではない。学生や教職員の環境美化に対する高い意識が必要であろう。キャンパスレンジャーは学生や教職員が有償ボランティアとして組織し、パトロール、屋外清掃、大学来訪者へのキャンパスツアー、キャンパス改善提案など幅広い活動を行うもので、自ら率先して環境美化を行うことで、参加者はもとより、その活動を見る者への啓蒙にもなり得ると考えられる。また大学側も積極的に支援することが望まれる。授業の課題として取り組むことも考えられる。

環境美化経費の調査について

1. 平成15年度 大阪大学建物清掃及び構内除草・剪定経費

内容区分	清掃			除草・剪定			備考
	調達発注	学部発注	計	調達発注	学部発注	計	
園地							
吹田園地	57,713	5,484	63,197	16,733	10,207	26,940	
石橋園地	41,497	1,752	43,249	7,702	959	8,661	
病院	0	123,000	123,000	0	1,513	1,513	医学部附属病院及び歯学部・附属病院
その他	700	348	1,048	1,167	0	1,167	
合計	99,910	130,584	230,494	25,602	12,679	38,281	